

平成24年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 児童生徒意識調査結果の分析

IV 意識調査結果の分析

児童生徒意識調査結果の分析に当たって

1 分析の方針

児童生徒意識調査の分析に当たっては、第I章の調査内容の中で述べた質問項目の構成から「学校生活」「学習動機」「学習活動(教科全般)」「家庭学習」「生活習慣等」というカテゴリーに分けて、分析を行った。

それぞれの設問については、

- ① 今回の調査に見られるおおまかな傾向
- ② 小学5年から中学3年までの5学年を通じた比較
- ③ 同一学年での定点比較(昨年度の小学6年と今年度の小学6年というような比較)
- ④ 回答状況と正答率との関連

という観点から調査結果の分析を行った。

2 分析に当たって留意した点

- (1) 分析の対象となるデータについては、「回答状況と正答率との関連」を見る関係上、各学年において全教科(小学5年、小学6年は4教科、中学1年は4教科、中学2年、中学3年は5教科)のペーパーテストを受検した児童生徒のデータを、有効回答としている。各学年の有効回答者数と有効回答者率は、下記のとおりである。

	有効回答者数	全回答者数	有効回答者率
小学5年	7,923人	8,356人	94.8%
小学6年	7,889人	8,433人	93.5%
中学1年	8,093人	8,452人	95.8%
中学2年	7,718人	8,066人	95.7%
中学3年	7,790人	8,164人	95.4%

- (2) 本章で記述する「正答率」については、有効回答者の全教科(小学5年、小学6年は4教科、中学1年は4教科、中学2年、3年は5教科)の平均正答率を用いた。
- (3) 「回答状況と正答率との関連」について記述については、それぞれの回答選択肢を選択した児童生徒全員の正答率の平均を求めて比較した。選択肢の回答状況によりそれぞれの回答選択肢を選択した児童生徒数は異なるため、児童生徒数が極めて少ない回答選択肢については、その正答率を比較することが適切でない場合も考えられる。このような場合については、その旨を文中に記した。

3 意識調査質問項目の構成

ア 質問項目の構成

- (ア) 学校生活
- (イ) 学習動機
- (ウ) 学習活動(教科全般)
- (エ) 学習活動(各教科)
- (オ) 家庭学習
- (カ) 生活習慣等

質問項目とそれぞれの設問との関係は以下の表のとおりである。

※ 小学校第6学年、中学校第3学年は全国調査の質問紙調査を実施。

質問項目		小学校 [全46問]	中学校 [全49問]
(ア) 学校生活		1・2・3・4	1・2・3・4
(イ) 学習動機		5・18(ア・イ・ウ・エ)・ 20(ア・イ・ウ・エ)・35・ 36	5・18(ア・イ・ウ・エ・ オ)・20(ア・イ・ウ・エ・ オ)・38・39 ※18(オ)・20(オ)は中2のみ
(ウ) 学習活動 (教科全般)		15・16・17・37	15・16・17・40
(エ) 学習活動 (各教科)	国語	19ア・22・23・24・25	19ア・22・23・24・25
	社会	19イ・26・27・28	19イ・26・27・28
	算数 数学	19ウ・29・30・31	19ウ・29・30・31
	理科	19エ・32・33・34	19エ・32・33・34
	英語		19オ・35・36・37 ※中2のみ
(オ) 家庭学習		6・7・8・9・10・11・ 12・13・14	6・7・8・9・10・11・ 12・13・14
(カ) 生活習慣等		21・38・39・40・41・42・ 43・44・45・46	21・41・42・43・44・45・ 46・47・48・49

イ 質問の意図

(ア) 学校生活

学校生活の楽しさ、好きな授業の有無などについて問うことにより、児童生徒の学校生活の実態を把握する。

(イ) 学習動機

勉強に対する興味や有用性、将来の夢や目標の有無について問うことにより、学習動機の高さについての実態を把握する。

(ウ) 学習活動(教科全般)

自分の考えを発表する機会や児童生徒の間で話し合う活動の頻度、自分の考えの表現に対する抵抗感について問うことにより、児童生徒の学習活動全般の実態について把握する。また、電子黒板などのICTを活用した授業の分かりやすさと利用状況を問うことにより、その効果と利活用の状況を把握する。

(エ) 学習活動(各教科)

各教科の内容の理解度についての自己評価、各教科の特性に応じた学習内容や学習方法についての児童生徒の興味・関心・意欲・態度について問うことにより、それぞれの教科についての学習活動の実態について把握する。

(オ) 家庭学習

授業以外の勉強時間や勉強の内容、塾や家庭教師の有無など児童生徒の学習方法全般について問うことにより、児童生徒の家庭学習の実態について把握する。

(カ) 生活習慣等

読書時間、テレビやゲームなどの時間、就寝時刻、朝食や家の手伝いの頻度、地域における行事などへの参加の頻度などについて問うことにより、児童生徒の家庭における生活習慣の実態について把握する。

教師意識調査結果の分析に当たって

1 分析の方針

教師意識調査の分析に当たっては、第 I 章の調査内容の中で述べた質問項目の構成から「教科全般における指導法の工夫」「学習環境の活用」「家庭学習への関与状況」「学校組織マネジメントに対する意識」というカテゴリーに分けて、分析を行った。

それぞれの設問については、

- ① 今回の調査に見られる全体的な傾向
- ② 学校スコアによるグループ比較

という観点から調査結果の分析を行った。

2 分析に当たって留意した点

- (1) 分析の対象となるデータについては、昨年度、小学校第4学年、小学校第5学年、小学校第6学年、中学校第1学年、中学校第2学年を担当した教師の2月調査での回答を用いている。回答者数は、下記のとおりである。

回答者数

小学校 1200人

中学校 965人

- (2) 教師意識調査の回答選択肢を指導の頻度や内容に応じて点数化し、各学校の有効回答者の平均を求めたものを学校スコアとしている。詳細は第 I 章の注を参照していただきたい。
- (3) 指導状況の違いを明らかにするために、各設問ごとに小、中学校の学校スコア上位四分の一の学校群をAグループ、下位四分の一の学校群をBグループとして、グループにおける平均正答率の状況を比較した。基本的にAグループがその指導が多く行われている(又は、意識が高い)学校群、Bグループがその指導があまり行われていない(又は、意識があまり高くない)学校群となっている。

3 意識調査質問項目の構成

ア 質問項目の構成

カテゴリ	小学校	中学校
(ア) 家庭学習への関与状況	設問2～6	設問2～6
(イ) 学習環境の活用	設問7～10	設問7～10
(ウ) 教科等全般における指導法の工夫	設問11～19	設問11～19
(エ) 教科の特性に応じた指導法の工夫	設問20～29	設問20～31
(オ) 教師の指導観	設問30～33	設問32～35
(カ) 学校組織マネジメントに対する意識	設問34～36	設問36～38

イ 質問の意図

(ア) 家庭学習への関与状況

宿題を出している頻度ならびに出している宿題の質(予習的宿題・復習的宿題)について問うことにより、宿題の出題状況を把握する。

(イ) 学習環境の活用

授業におけるコンピュータや学校図書館の活用頻度とその活用内容を把握する。

(ウ) 教科等全般における指導法の工夫

発展的な課題を取り入れた授業の実施状況、理解が十分でない児童生徒に対する授業外での対応状況、書いて表現する活動や話し合い活動を取り入れた授業の実施(教科の授業・総合的な学習の時間)、身に付けさせた力を意識した総合的な学習の時間の指導、学習方法についての指導状況、学習形態の工夫、目標や評価規準を明確にした授業の実施について問うことにより、発展的学習・補充的指導・表現力の育成、総合的な学習の時間の指導、学習方法の指導、学習形態の工夫、目標を明確にした指導などの状況を把握する。

(エ) 教科の特性に応じた指導法の工夫

国語における言語活動、読書指導、社会における調査学習を生かした発表・討論、算数・数学における算数(数学)的活動、問題解決的な学習、理科における見通しをもった観察や実験とそのまとめ、英語におけるコミュニケーション能力を高める指導や書く活動などについて問うことにより、各教科の特性に応じた指導法の工夫の状況を把握する。

(オ) 教師の指導観

教師の指導行動を主に、課題達成の意識、集団維持の意識の2点から問うことにより、教師の指導観と正答率に及ぼす影響を分析する。

(カ) 学校組織マネジメントに対する意識

教育活動方針の理解、方針や内容についての共通理解、職員間の雰囲気について問うことにより、学校組織マネジメントが児童生徒の正答率や児童生徒の学習に対する意識に及ぼす影響を把握する。

最終更新日：2012-10-15

平成24年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 児童生徒意識調査結果の分析

児童生徒意識調査結果の分析

児童生徒意識調査結果の分析に関わる全てのグラフ

1 学校生活

- 「友達に会うのは楽しい」及び「学校で落ち着いて勉強することができる」と回答した児童生徒の割合は、小学校、中学校ともに全体の9割を越えている。[図1][図3]
- 全ての学年において、「友達と会うのは楽しい」、「落ち着いて勉強することができる」と回答している児童生徒ほど、平均正答率が高くなっている。[図2][図4]
- 「教科の勉強が好きだ」と感じている児童生徒の割合は、国語の小学6年生、中学3年生、算数・数学の小学6年生において増加している。[図5][図6]

ここでは、児童生徒の学校生活についての調査結果を述べる。具体的には、学校生活の楽しさや学習状況の設問について分析した。

ア 「友達に会うのは楽しい」について

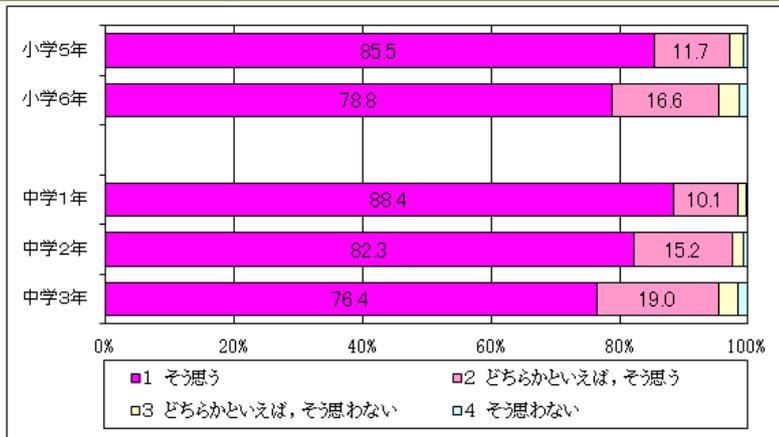


図1 「友達に会うのは楽しい」の回答の割合

「そう思う」と回答した児童生徒の割合は、小学5年85.5%、小学6年78.8%、中学1年88.4%、中学2年82.3%、中学3年76.4%となっている。「どちらかといえばそう思う」と回答した児童生徒の割合を合わせると、小学生、中学生ともに、どの学年も9割を越えている。特に、中学1年では98.5%と最も高い割合である。[図1]

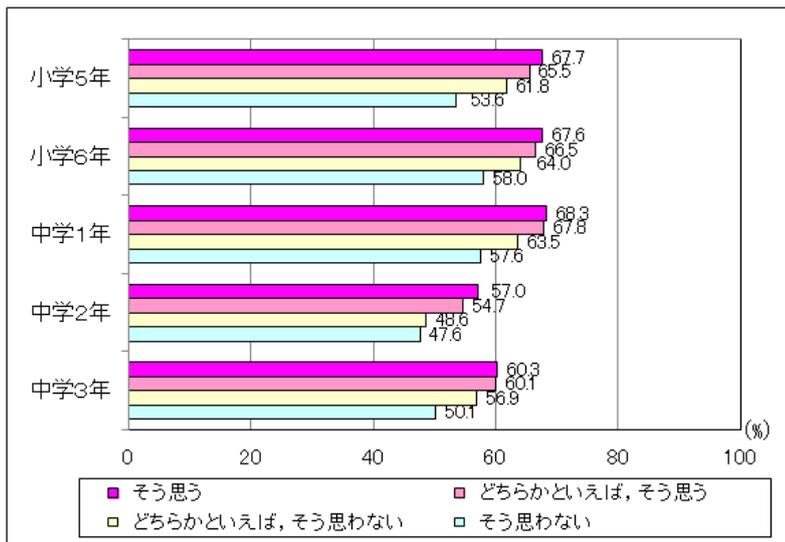


図2 「友達に会うのは楽しい」の回答状況と正答率

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において、「そう思う」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。「友達と会うのが楽しい」と回答した児童生徒ほど、平均正答率が高くなっている。[図2]

イ 「学校では落ち着いて勉強することができる」について

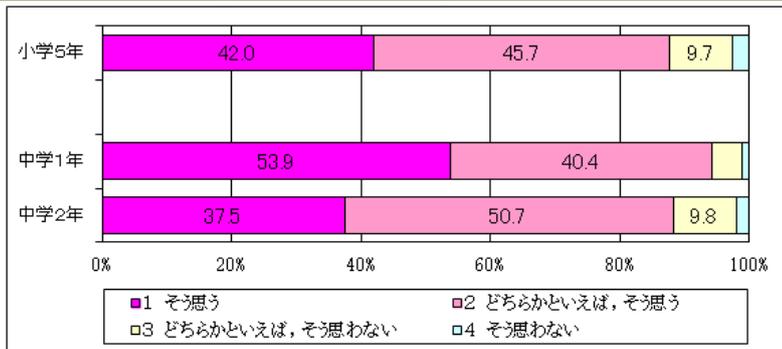


図3 「学校では落ち着いて勉強することができる」の回答の割合

「そう思う」と回答した児童生徒の割合は、小学5年42.0%、中学1年53.9%、中学2年37.5%となっている。「どちらかといえばそう思う」と回答した児童生徒の割合を合わせると、小学5年では87.7%、中学1年では94.3%、中学2年では88.2%である。中学1年では94.3%と最も高い割合である。[図3]

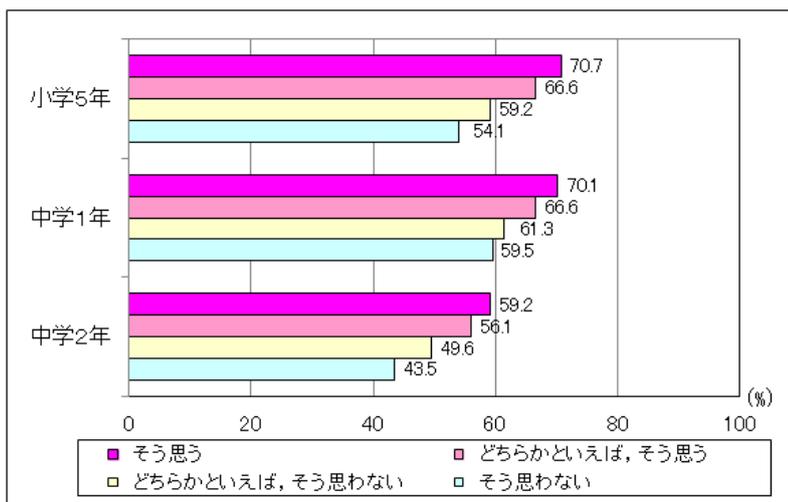


図4 「学校では落ち着いて勉強することができる」の回答状況と正答率

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において「そう思う」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。「落ち着いて勉強することができる」と回答した児童生徒ほど、平均正答率が高くなっている。[図4]

ウ 「教科の勉強が好きだ」について

① 国語について

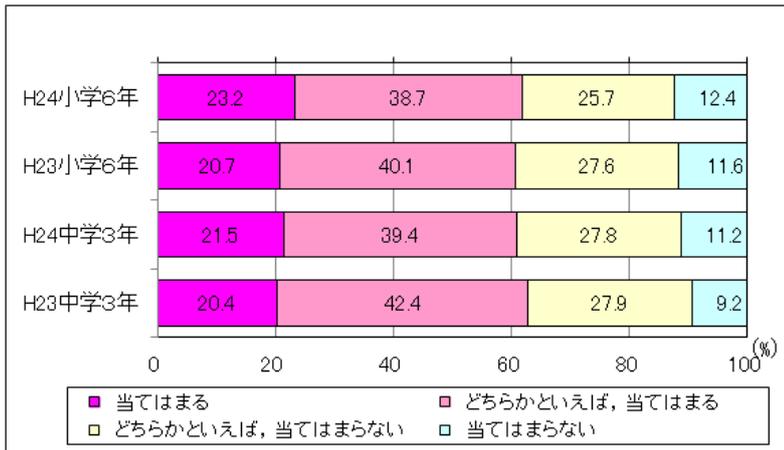


図5 「国語の勉強が好きだ」の回答の割合

平成24年度の小学6年における「当てはまる」の割合は、2.5ポイント増えている。中学3年においても「当てはまる」の割合は1.1ポイント増えているが大きな変化は見られない。平成23年度では「教科の勉強が好きだ」との回答が減っているという課題があった。そのことを考慮すると、今後も指導改善が必要となってくる。【図5】

② 算数について

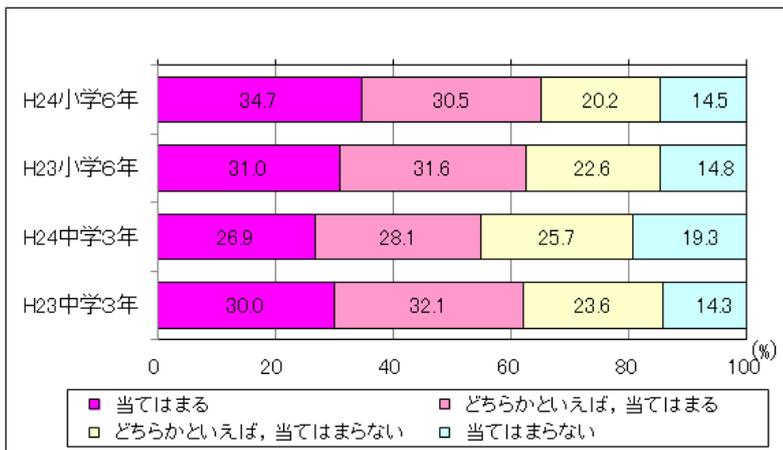


図6 「算数・数学の勉強が好きだ」の回答の割合

小学6年生においては、「当てはまる」の割合が3.7ポイント増えている。しかし、中学3年生においては、「当てはまる」の割合が3.1ポイント減っている。そのことからすれば、中学3年生においては指導改善が必要となってくる。【図6】

○ これからの指導に向けて

「友達に会うことの楽しさ」や「落ち着いた学習への取り組み」について「そう思う」と回答した児童の平均正答率が最も高くなっている。このことから、友達に会ったり、落ち着いて学習できたりするなどの学級づくりと学力の定着については関係があると考えられる。クラスが落ち着き、友達どうしが互いに認め合ったり、励まし合ったりしていくことで学習への意欲も高まっていくことが考えられる。そのため、学級経営を基盤とした授業づくりが必要である。平成24年度の「国語の学習が好きだ」においては「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」の回答率が増加したが大きな変化は見られなかった。算数・数学においては、小学6年と中学3年を比較すると、中学3年になると好きな教科が減っていくという結果がでている。理由として学習内容が増えることや難易度が上がることが挙げられる。好きな教科がある児童の平均正答率が最も高くなっているため、教科を好きになるような指導を考えていくことが大切である。

最終更新日: 2012-10-15

平成24年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 児童生徒意識調査結果の分析

児童生徒意識調査結果の分析

児童生徒意識調査結果の分析に関わる全てのグラフ

2 学習動機

- 「将来の夢や目標をもっている」と回答した児童生徒は、小学校で8割を超えている。しかし、中学校3年では7割を越えるほどとなる。学年が上がるごとにその割合は減少している。[図1]。

ここでは、「将来の夢や目標をもっているか」という設問を通して、児童生徒の将来に対する意識と全教科平均正答率との関連についての調査結果を述べる。

ア「将来の夢や目標をもっている」について

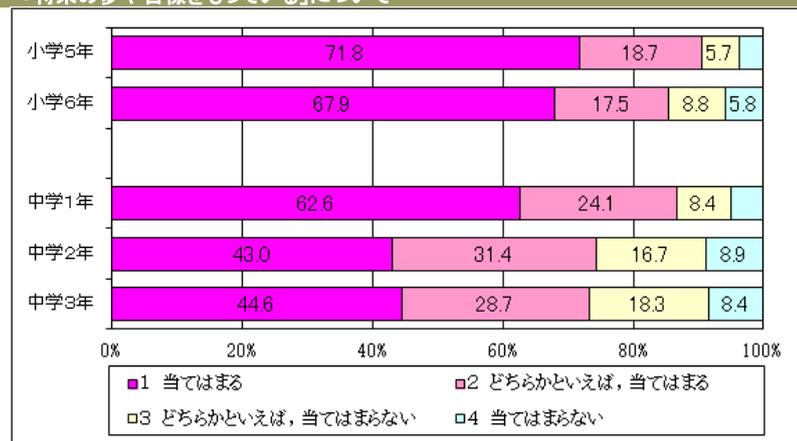


図1 「将来の夢や目標をもっている」の回答状況

「当てはまる」と回答した児童生徒の割合が小学5年71.8%、小学6年67.9%、中学1年62.6%、中学2年43.0%、中学3年44.6%となっている。「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童生徒の割合を合わせると、小学校では80%を、中学校では70%を上回っている。全体として、学年が上がるにしたがって、「将来の夢や目標をもっている」と回答した児童生徒の割合が低くなっている。[図1]

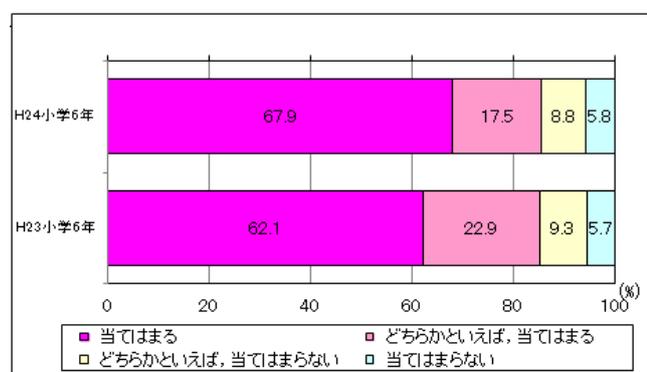


図2-1「将来の夢や目標をもっている」の小学6年の経年比較

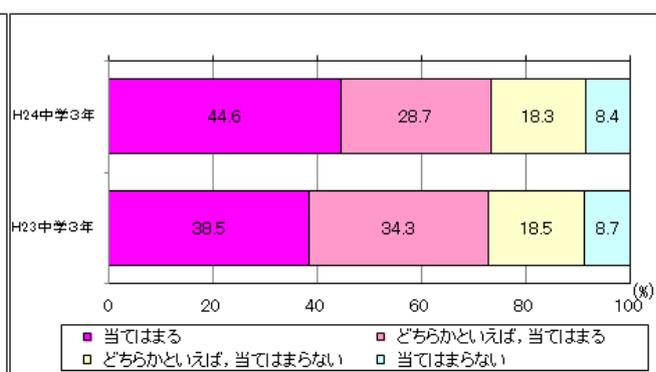


図2-2「将来の夢や目標をもっている」の中学3年の経年比較

小学6年と中学3年における「当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、平成23年度と比べると、増えている。しかし、「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合を合わせて比べると、大きな変化は見られない。[図2-1][図2-2]

○ これからの指導に向けて

「将来の夢をもつ」と学習意欲には大きな関係があると考えられる。なぜなら、将来の夢を持つことで将来への見通しが明確となり、学習意欲が高まっていくと考えられるからである。夢をもたせることは、教科だけでなくキャリア教育や特別活動など学校教育全体で取り組むことが大切である。しかし、現状の学習と将来の夢についての関係があいまいになることで学習意欲が低くなる児童、生徒が出てくることも考えられる。そのため、現状の学習が将来のためにどのように役立っていくのか、あるいはつながっていくのかを実感させていくような支援を考えていくことが大切である。

最終更新日：2012-10-15

平成24年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

[Web報告書もくじ](#)>IV 児童生徒意識調査結果の分析

児童生徒意識調査結果の分析

[児童生徒意識調査結果の分析に関わる全てのグラフ](#)

3 学習活動(教科全般)

- 学年が上がるにつれて、話し合う活動をよく行っていると思う生徒の割合が減り、自分の考えを表現することが難しいと思う生徒の割合が増えている。[図1][図2][図3][図4]

ここでは、授業中に「話し合う活動をよく行っているか」「他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しいと思うか」という設問を通して、平成23年度と平成24年度の児童生徒の経年比較(同一学年及び同一児童生徒)の授業中における表現活動に関する意識の状況と、平成24年度の回答状況と全教科平均正答率との関連について調査結果を述べる。

ア 「普段の授業では、児童(生徒)の間で話し合う活動をよく行っていると思う」についての経年比較(同一学年及び同一児童生徒)

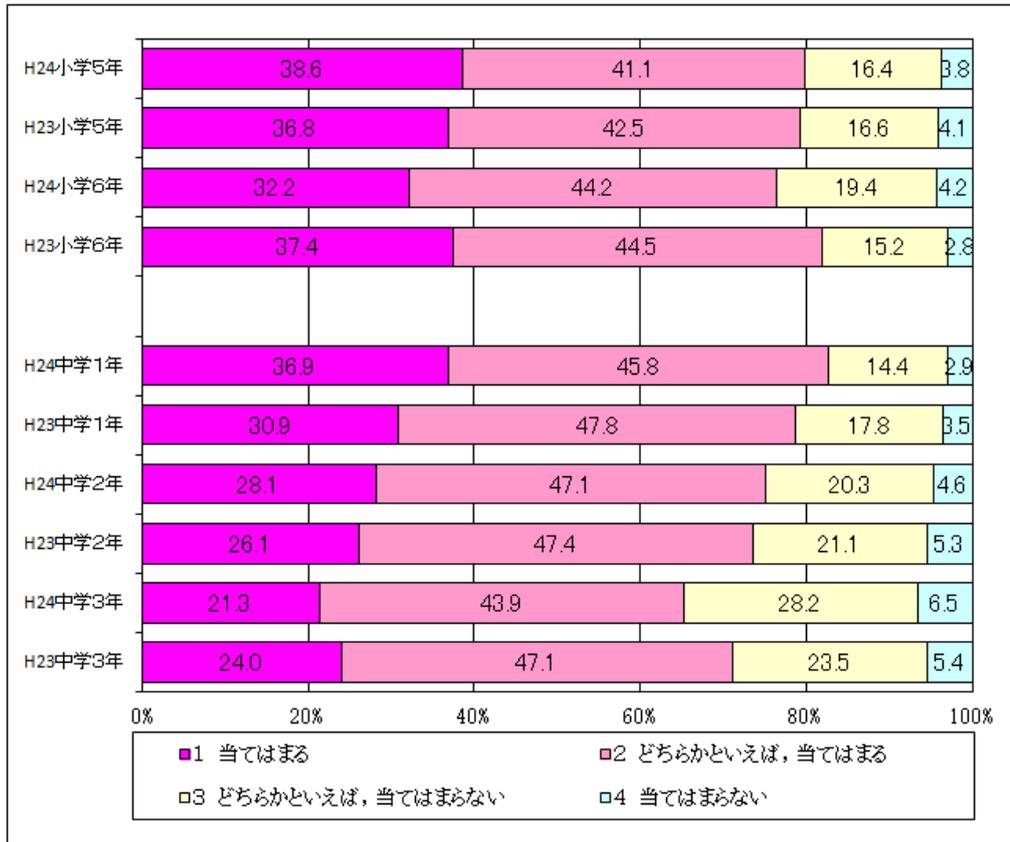


図1 「授業では、話し合う活動をよく行っていると思う」の回答状況の経年比較

小学5年から小学6年、中学1年から中学3年と学年が上がるごとに、「当てはまる」と回答した児童生徒の割合が減っていた。同一学年の経年比較では、小学5年、中学1年、中学2年において、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合が増えていた。同一児童生徒の経年比較では、小学6年から中学3年までは、「当てはまる」と回答した児童生徒の割合が減っていた。[図1]

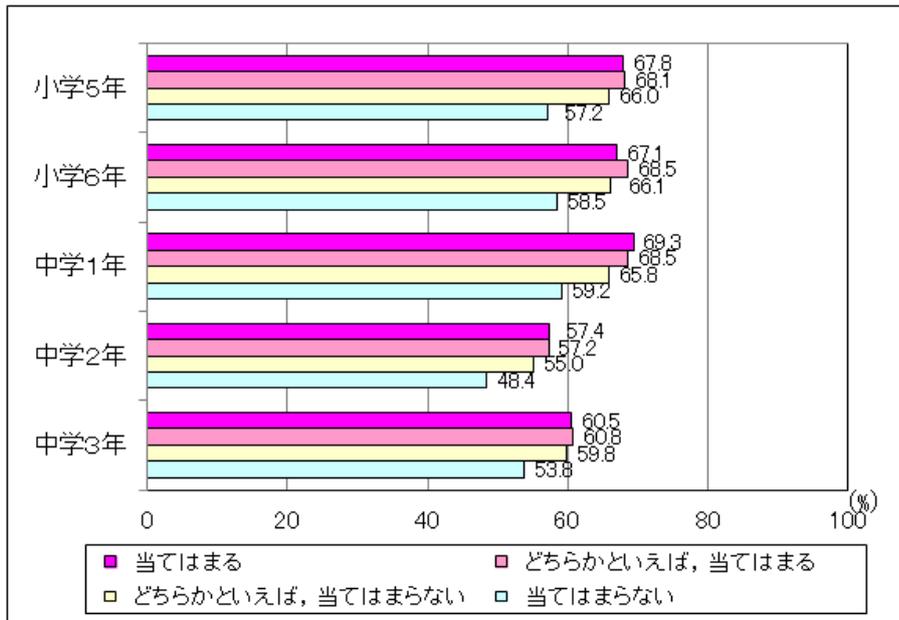


図2 「授業では、話し合う活動をよく行っていると思う」の回答状況と平成24年度の全教科平均正答率

「授業では、話し合う活動をよく行っていると思う」の回答状況と平成24年度全教科平均正答率との関連を見ると、明確な関連は見られないが、全ての学年に共通して、授業でよく話し合う活動を行っていると思うことに対し、「当てはまらない」と回答している児童生徒の平均正答率は、他の回答をした児童生徒に比べ、低くなっていた。[図2]

イ 「学校の授業などで、自分の考えをほかの人に説明したり、文章に書いたりするのは難しい」についての経年比較(同一学年及び同一児童生徒)

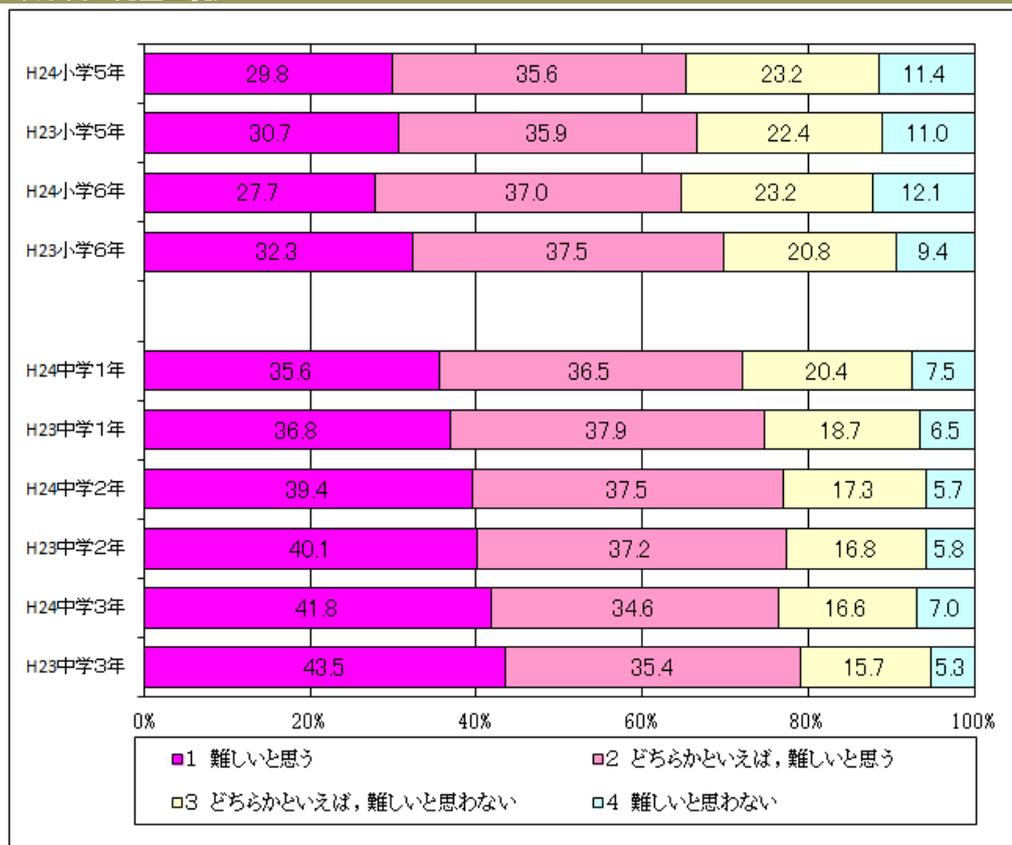


図3 「授業などで、自分の考えを表現するのは難しい」の回答状況の経年比較

中学1年から中学3年まで、学年が上がるごとに、「難しいと思う」と回答した生徒の割合が増えていた。しかし、同一学年の経年比較では、全ての学年で「難しいと思う」と回答した児童生徒の割合は減っていた。同一児童生徒の経年比較では、中学校の全学年において、「難しいと思う」と回答した生徒の割合が増えており、自分の考えを表現するのが難しいと思う中学生の割合が増える傾向にある。[図3]

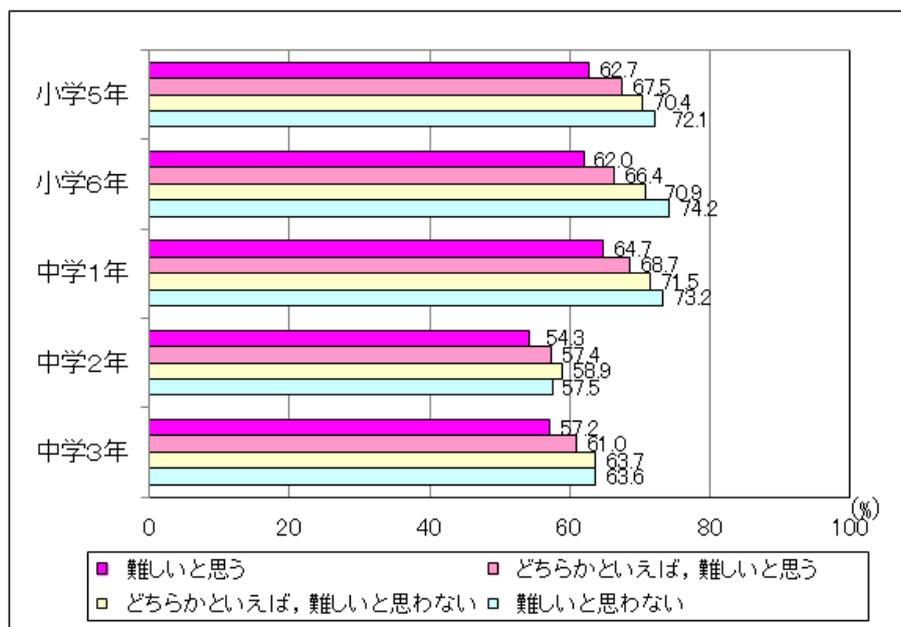


図4 「授業などで、自分の考えを表現するのは難しい」の回答状況と平成24年度の全教科平均正答率

「授業などで、自分の考えを表現するのは難しい」の回答状況と全教科平均正答率との関連から、学年を問わず「難しいと思う」と回答した児童生徒の平均正答率が最も低くなっている。小学5年、小学6年、中学1年については、「難しいと思わない」「どちらかといえば、難しいと思わない」と回答している児童生徒ほど、平均正答率が高くなっている。[図4]

○ これからの指導に向けて

児童生徒の意識調査の経年比較と教科平均正答率の結果より、毎日の授業の中で、最低1回は自分の考えをかく時間と
かいたものを説明する時間を必ず確保することが大切であるとする。自分の考えを説明したり、文章にかいたりする
ことが難しいと思っている児童生徒に対しては、選択式を取り入れたり、グループ活動を取り入れたりして自分の
思いや考えを表現する場のハードルを低く設定し、選択した理由についても説明させることで自分の思いや
考えを表現することに慣れさせる必要があるとする。

最終更新日：2012-10-15

平成24年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査結果の分析

児童生徒意識調査結果の分析

児童生徒意識調査結果の分析に関わる全てのグラフ

4 家庭学習

- 1日あたりの学習時間については、平成23年度と平成24年度の児童生徒共に同程度であり、学習時間が増えてないのが現状である。[図1][図2][図3][図4]
- 自分で計画を立てて勉強する生徒、特に、学校の宿題、予習や復習をしている児童生徒ほど全教科平均正答率が高くなっている。[図5][図6][図7][図8][図9][図10][図11][図12]

ここでは、児童生徒の家庭学習についての調査結果について述べる。具体的には、家庭学習の時間と学習の内容や仕方について、平成23年度と平成24年度の経年比較(同一学年及び同一児童生徒)と、平成24年度の回答の状況と全教科平均正答率との関連について述べる。

ア 「学校の授業時間以外に、普段(月曜日から金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか」についての経年比較(同一学年及び同一児童生徒)

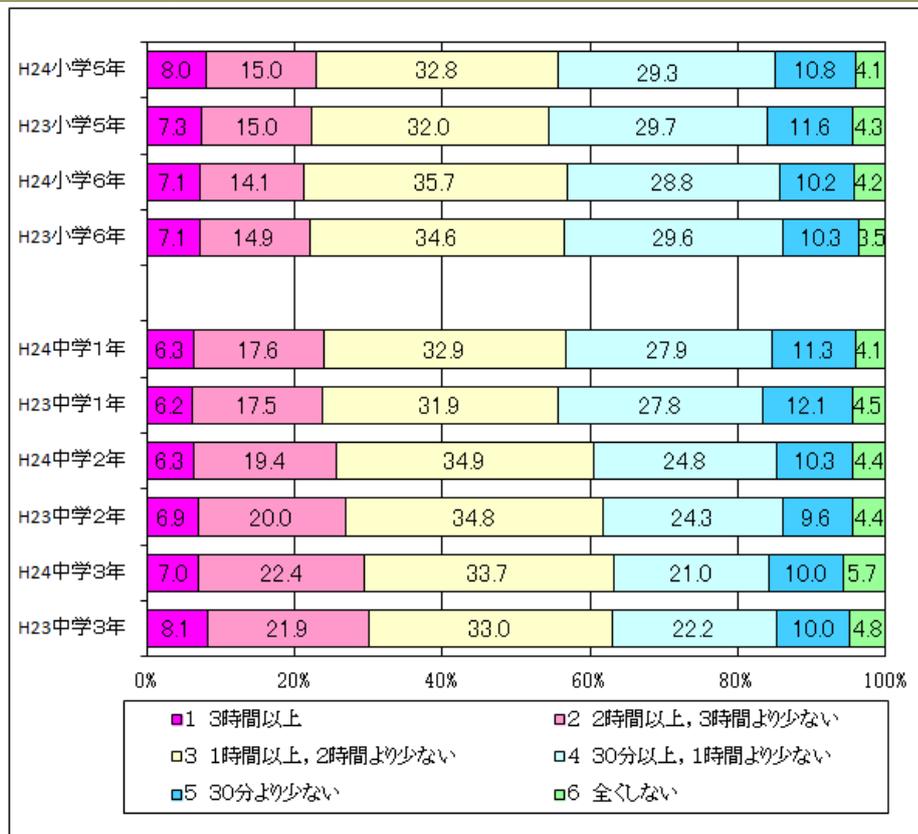


図1 「普段、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか」の回答状況の経年比較

学習時間については、中学校においては、学年が上がるごとに増加する傾向が見られる。同一学年の経年比較については、「3時間以上」「2時間以上、3時間より少ない」と回答した児童生徒の割合は、小学5年と中学1年は増えていた。1時間以上していると回答した児童生徒の割合は、小学5年、小学6年、中学1年、中学3年は増えていた。全学年において1時間より少ないと答えた児童生徒の割合は、平成23年度同様に4割程度となった。同一児童生徒の経年比較については、1時間以上していると回答した児童生徒の割合は、小学6年から中学校3年まで増えていた。[図1]

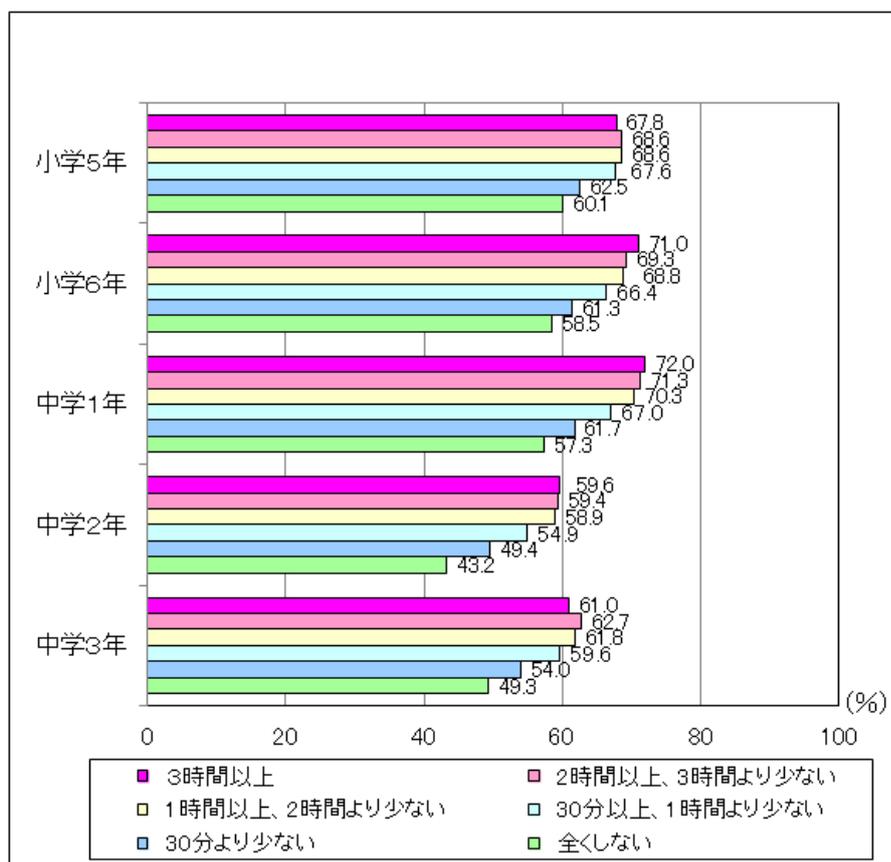


図2 「普段、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか」の回答状況と
平成24年度全教科平均正答率

「普段、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか」の回答状況と平成24年度の全教科平均正答率との関連から、小学6年、中学1年、中学2年については、勉強する時間が長い児童生徒ほど平均正答率が高くなっている。[図2]

イ 「土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか」についての経年比較(同一学年及び同一児童生徒)

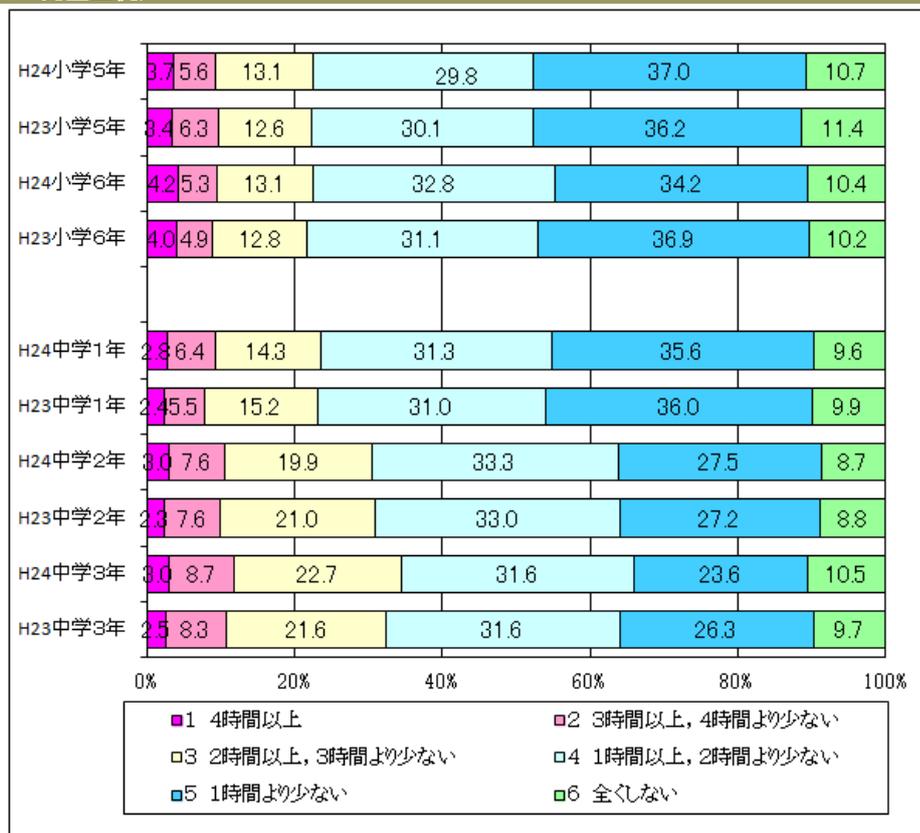


図3 「休みの日に、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか」の回答状況の経年比較

2時間以上していると回答した児童生徒の割合は、学年が上がるごとに増えている。同一学年の経年比較については、2時間以上していると回答した児童生徒の割合が、小学6年、中学1年、中学3年が増えていた。全学年において、1時間より少ないと回答した児童生徒の割合は、平成23年度同様に3割から4割程度となった。同一児童生徒の経年比較については、2時間以上または1時間以上していると回答した児童生徒の割合は、小学6年から中学校3年まで増えていた。[図3]

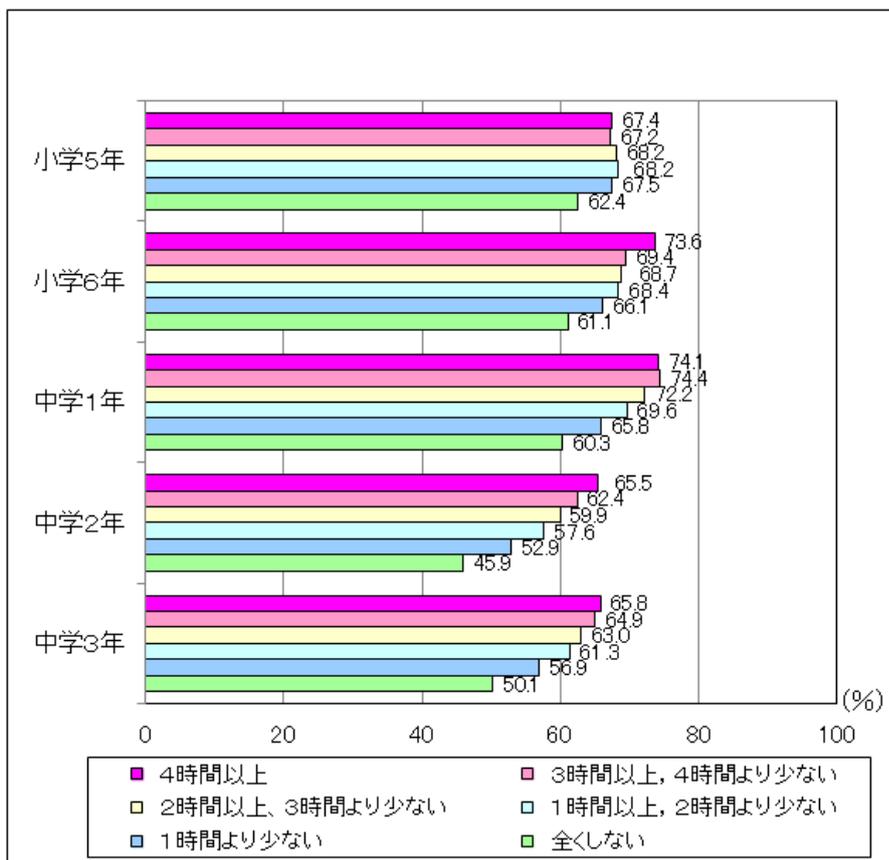


図4 「学校が休みの日に、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか」の回答状況と平成24年度全教科平均正答率

「学校が休みの日に、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか」の回答状況と平成24年度の全教科平均正答率との関連から、小学6年生、中学2年生、中学3年生については、勉強時間が長ければ長いほど平均正答率が高くなっている。[図4]

ウ 「自分で計画を立てて勉強している」についての経年比較(同一学年及び同一児童生徒)

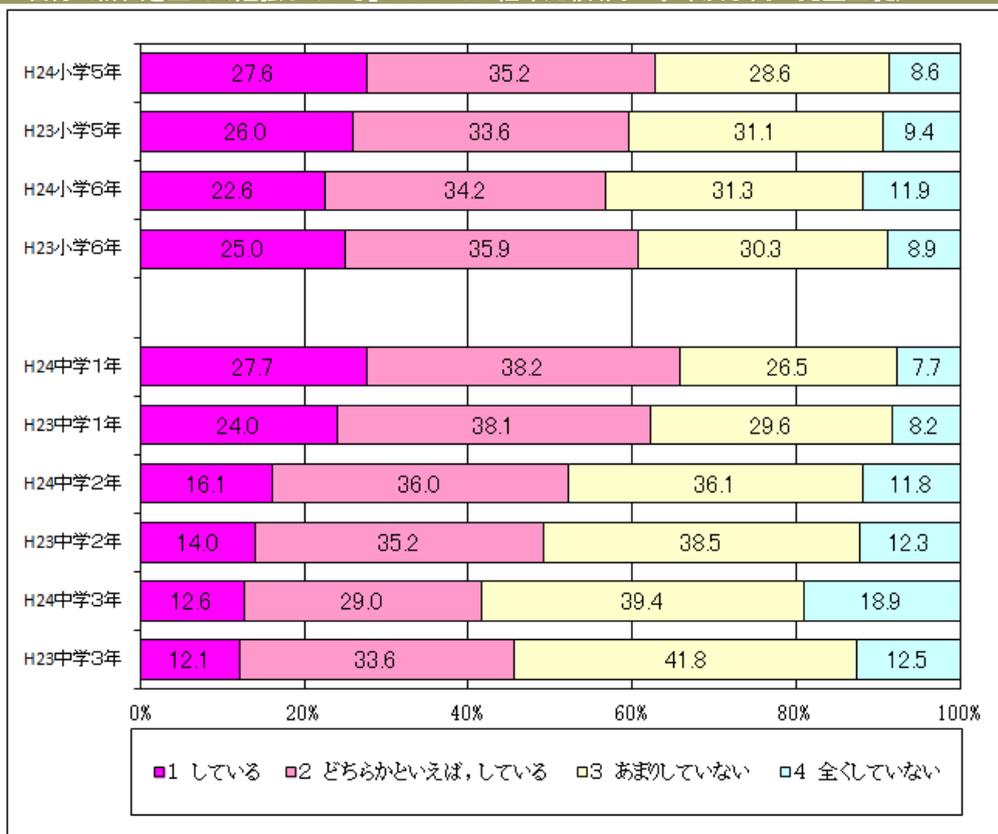


図5 「自分で計画を立てて勉強している」の回答状況の経年比較

小学5年から小学6年、中学1年から中学3年と学年が上がるごとに、「している」「どちらかといえば、している」と回答した児童生徒の割合が減っていた。同一学年の経年比較については、小学5年、中学1年、中学2年の「している」「どちらかといえば、している」と回答した児童生徒の割合が増えていた。同一児童生徒の経年比較については、中学1年生の「している」「どちらかといえば、している」と回答した生徒の割合が増えていた。[図5]

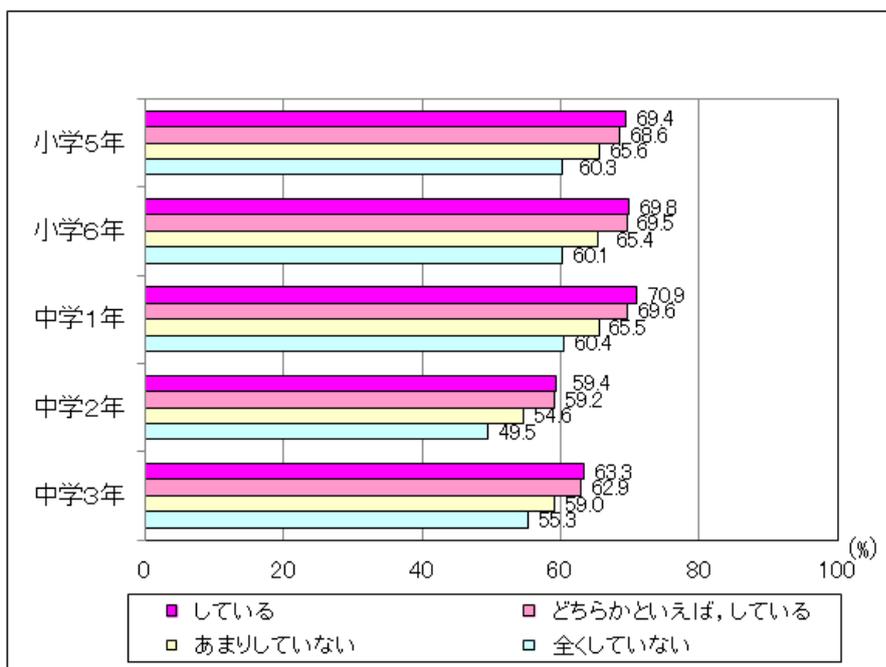


図6 「自分で計画を立てて勉強している」の回答状況と平成24年度全教科平均正答率

「自分で計画を立てて勉強している」の回答状況と平成24年度の全教科平均正答率との関連から、全学年において、「予習をしている」と回答した児童生徒ほど平均正答率が高くなっている。[図6]

エ 「学校の宿題をしている」についての経年比較(同一学年及び同一生徒児童)

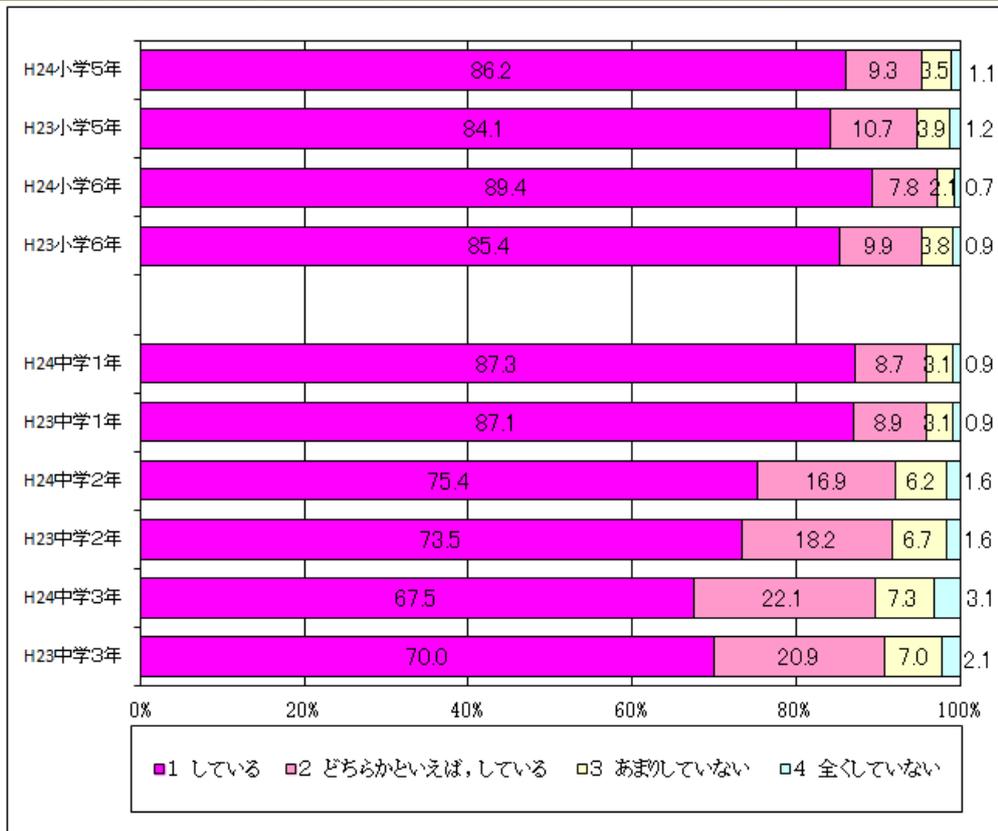


図7 「学校の宿題をしている」の回答状況の経年比較

小学6年から中学3年まで学年が上がるごとに、「している」と回答した児童生徒の割合が減っていた。同一学年の経年比較では、小学5年、小学6年、中学1年、中学2年の「している」と回答した児童生徒の割合が増えていた。同一生徒の経年比較では、小学6年、中学1年の「している」「どちらかといえば、している」と回答した生徒の割合が増えていた。[図7]

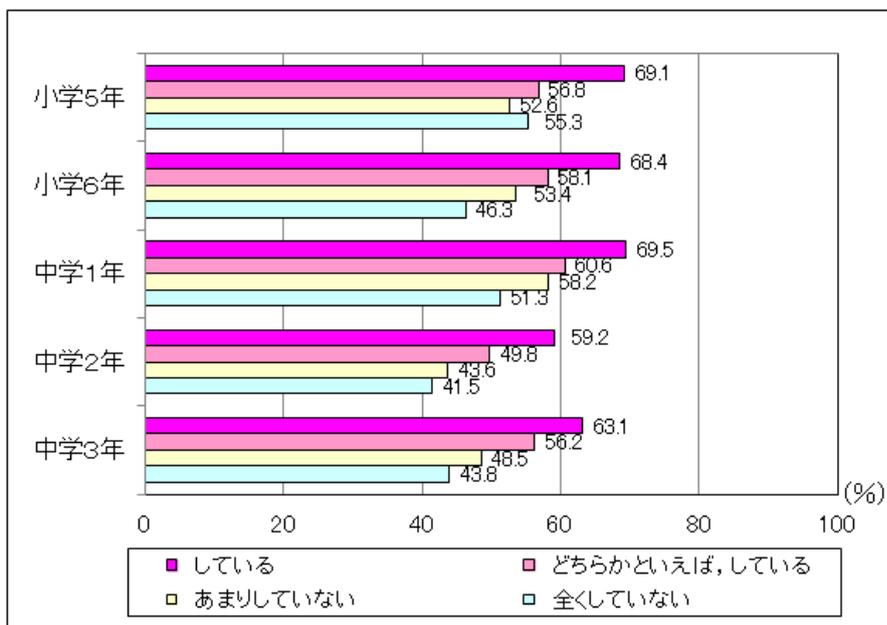


図8 「学校の宿題をしている」の回答状況と平成24年度全教科平均正答率

「学校の宿題をしている」の回答状況と平成24年度全教科平均正答率との関連を見ると、全学年において、「している」と回答した児童生徒ほど平均正答率が高くなっている。[図8]

オ 「学校の授業の予習をしている」についての経年比較(同一学年及び同一児童生徒)

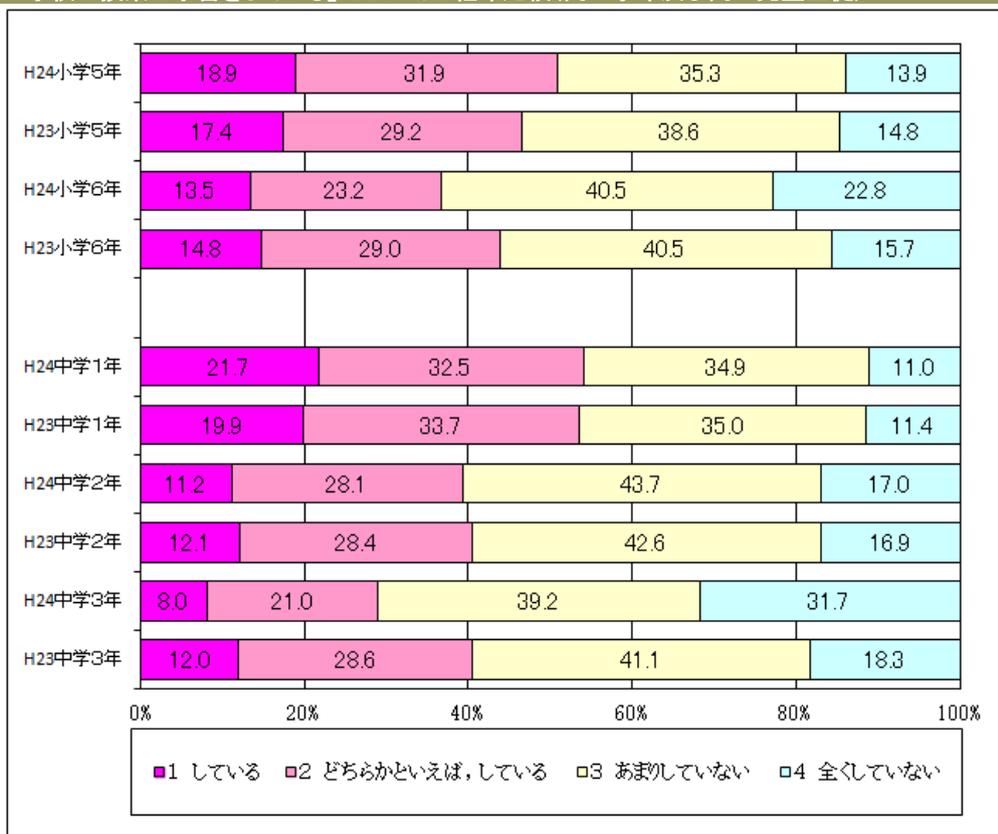


図9 「学校の授業の予習をしている」の回答状況の経年比較

学校の授業の予習について、中学1年の「している」「どちらかといえば、している」と回答した生徒の割合が最も多い。同一学年の経年比較については、小学5年、中学1年、中学2年の「している」「どちらかといえば、している」と回答した児童生徒の割合が増えていた。同一児童生徒の経年比較については、中学1年の「している」「どちらかといえば、している」と回答した生徒の割合が増えていた。[図9]

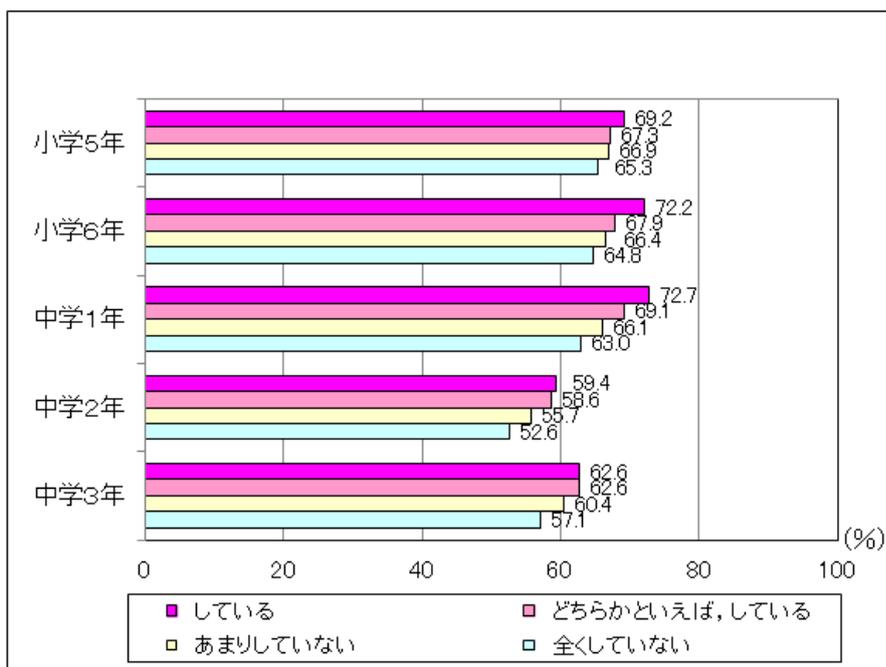


図10 「学校の授業の予習をしている」の回答状況と平成24年度全教科平均正答率

「学校の授業の予習をしている」の回答状況と平成24年度全教科平均正答率との関連を見ると、「している」と回答している児童生徒ほど平均正答率が高くなっている。[図10]

カ 「学校の授業の復習をしている」についての経年比較(同一学年及び同一児童生徒)

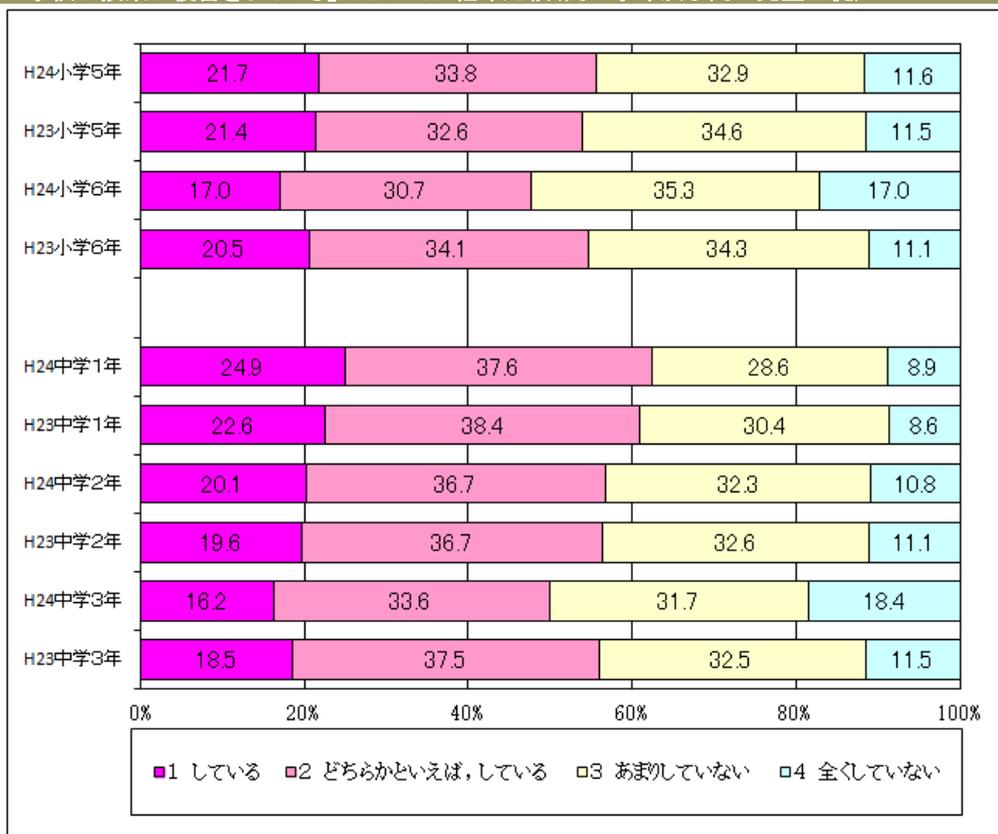


図11 「学校の授業の復習をしている」の回答状況の経年比較

学校の授業の復習について、中学1年生の「している」「どちらかといえば、している」と回答した生徒の割合が最も多い。同一学年の経年比較については、小学5年、中学1年、中学2年の「している」「どちらかといえば、している」と回答した児童生徒の割合が増えていた。同一児童生徒の経年比較については、中学1年の「している」「どちらかといえば、している」と回答した生徒の割合が増えていた。[図11]

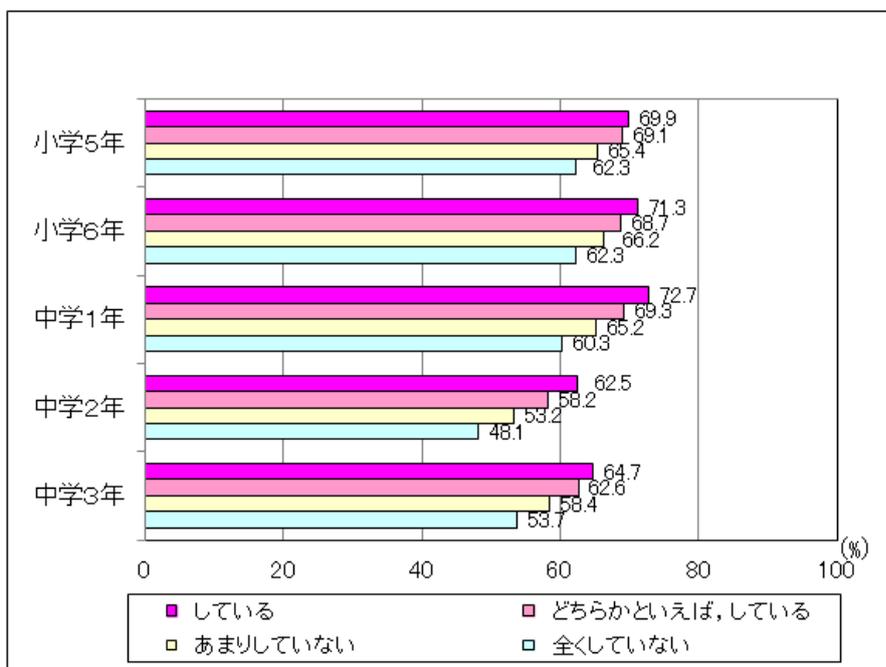


図12 「学校の授業の復習をしている」の回答状況と平成24年度全教科平均正答率

「学校の授業の復習をしている」の回答状況と平成24年度全教科平均正答率との関連を見ると、「している」と回答している児童生徒ほど平均正答率が高くなっている。[図12]

○ これからの指導に向けて

1日あたりの家庭学習の時間についての児童生徒の経年比較では、各学年における学習時間の割合は、ほぼ同程度で、家庭学習の時間が増えていないのが現状である。自分で計画を立てて勉強をする児童生徒、特に学校の宿題、予習や復習をしている児童生徒ほど全教科平均正答率が高い傾向が見られた。そのため、自分で家庭学習の計画を立てて学習に取り組むことができるようにする必要がある。児童生徒が家庭学習の計画を考える時間を設定し、その際に、宿題、予習や復習に取り組む時間を確保し、計画的に実施することができるよう無理のない計画を立てさせるようにすることが大切であると考え。当たり前のことに当たり前に取り組むことができる児童生徒の育成を図りたい。宿題については、発達の段階に応じて、宿題の質や量、チェックの仕方、家庭学習に対する意識のもたせ方、保護者との連携の図り方等、再度家庭学習に関して見直し、改善を図って行く必要がある。

最終更新日：2012-10-15

平成24年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査結果の分析

IV 児童生徒意識調査結果の分析

児童生徒意識調査結果の分析に関わる全てのグラフ

5 生活習慣等

- 読書が好きな児童生徒は、どの学年も70%を上回っている。[図1]しかし、読書の時間について、「まったくしない」、「10分より少ない」と回答した児童生徒の割合は、学年が上がるにつれて増加している。[図4]
- 朝食を毎日食べていると回答した児童生徒の割合は、各学年とも8割を上回っている。[図7]また、朝食をきちんと食べている児童生徒ほど平均正答率が高くなっている。[図8]
- テレビを視聴したりテレビゲームをしたりする時間が長くなるほど、平均正答率も低くなる傾向が見られる。[図13、図16]

ここでは、読書時間、テレビやゲームなど自由に過ごす時間、就寝時刻、朝食など、生活習慣全般についての設問から、児童生徒の生活習慣についての調査結果を述べる。

なお、経年を比較する際には、小学校、中学校の最高学年である小学6年と中学3年の結果を基に比較することとする。

ア 「読書は好きだ」について

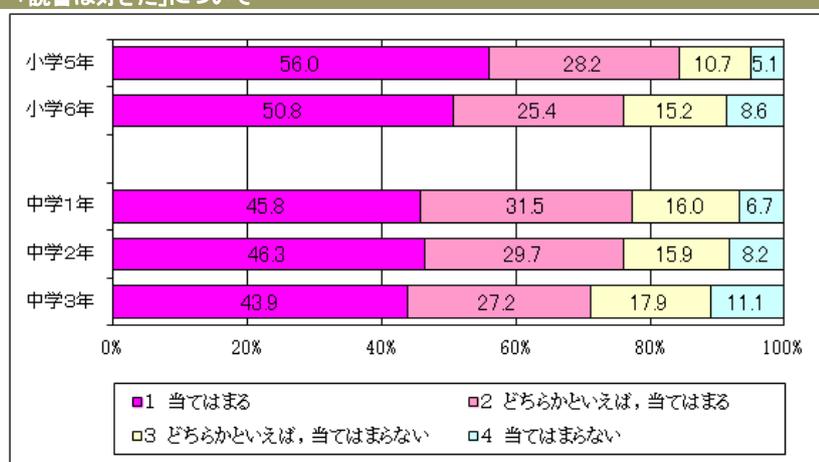


図1 「読書は好きだ」の回答状況

「当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、小学5年56.0%、小学6年50.8%、中学1年45.8%、中学2年46.3%、中学3年43.9%となっている。「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合を合わせると、全ての学年が7割を上回っている。特に、小学5年では、84.2%と最も高い割合であった。一方で、「どちらかといえば、当てはまらない」「当てはまらない」と回答している児童生徒の割合を見ると、学年が上がるにしたがって、高くなる傾向が見られた。[図1]

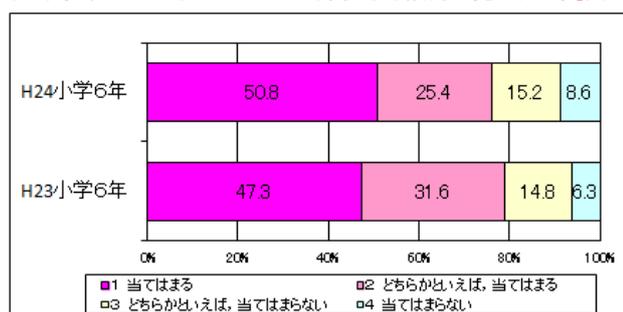


図2-1 小学6年の「読書は好きだ」の回答状況

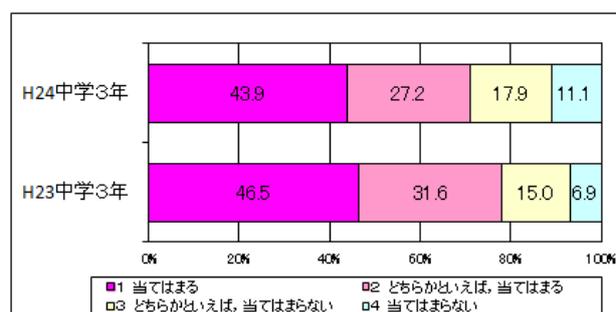


図2-2 中学3年の「読書は好きだ」の回答状況

この設問について、小学6年と中学3年を平成23年度と比べると、小学6年においては、「当てはまる」と回答した児童の割合が3.5ポイント上回った。一方で「どちらかといえば、あてはまらない」「当てはまらない」と回答した児童の割合も2.7ポイント上回る結果となった。中学3年においては、「どちらかといえば、あてはまらない」「当てはまらない」と回答した生徒の割合が7.1ポイント上回った。[図2-1、図2-2]

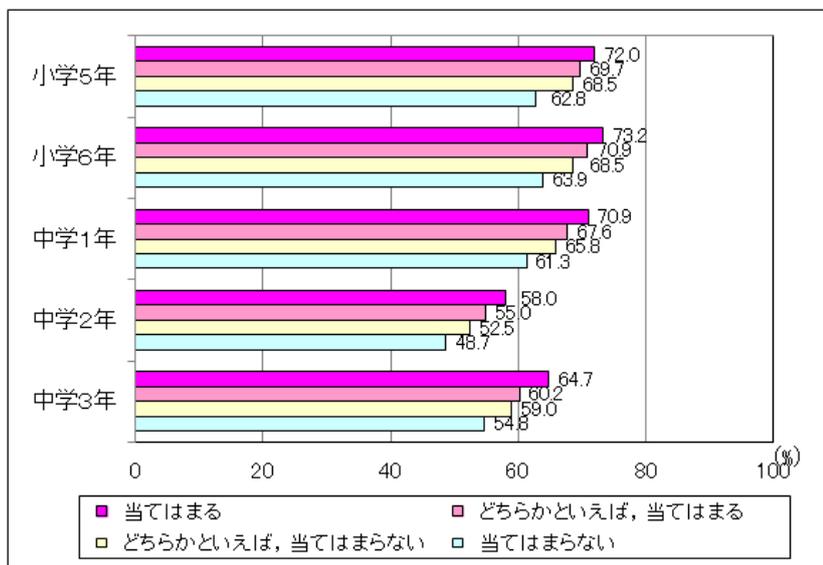


図3 「読書が好きだ」の回答状況と正答率

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において、「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。読書が好きだと感じている児童生徒ほど、平均正答率が高くなっている。[図3]

イ 「普段(月曜日から金曜日)、何時ごろにねますか」について

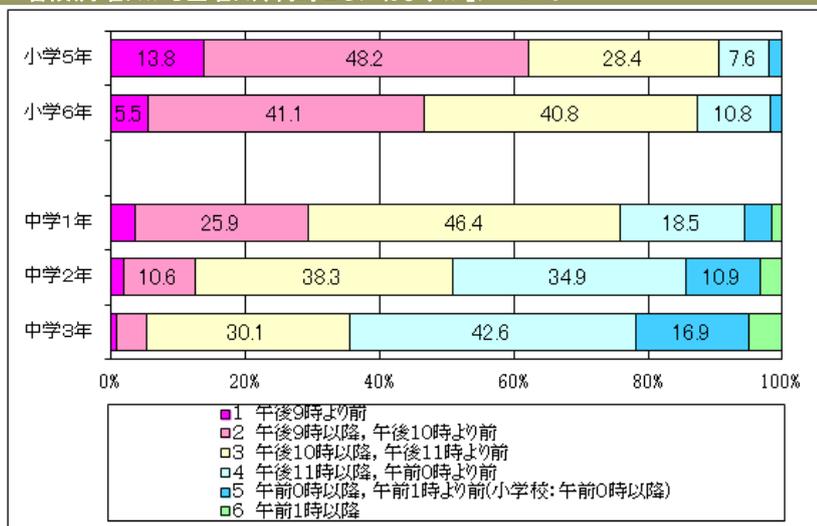


図4 「普段、何時ごろにねますか」の回答状況

小学校では、「午後9時以降、午後10時より前」と回答した児童の割合が、小学5年48.2%、小学6年41.10%と最も高かった。中学1年と中学2年では、「午後10時以降、午後11時より前」が最も高く、中学1年では、46.4%、中学2年では38.3%となっている。中学3年では、「午後11時以降、午前0時より前」が最も高く、42.6%となっている。また、午後11時以降と回答している児童生徒の割合は、学年が上がるにしたがって、高くなっている。[図4]

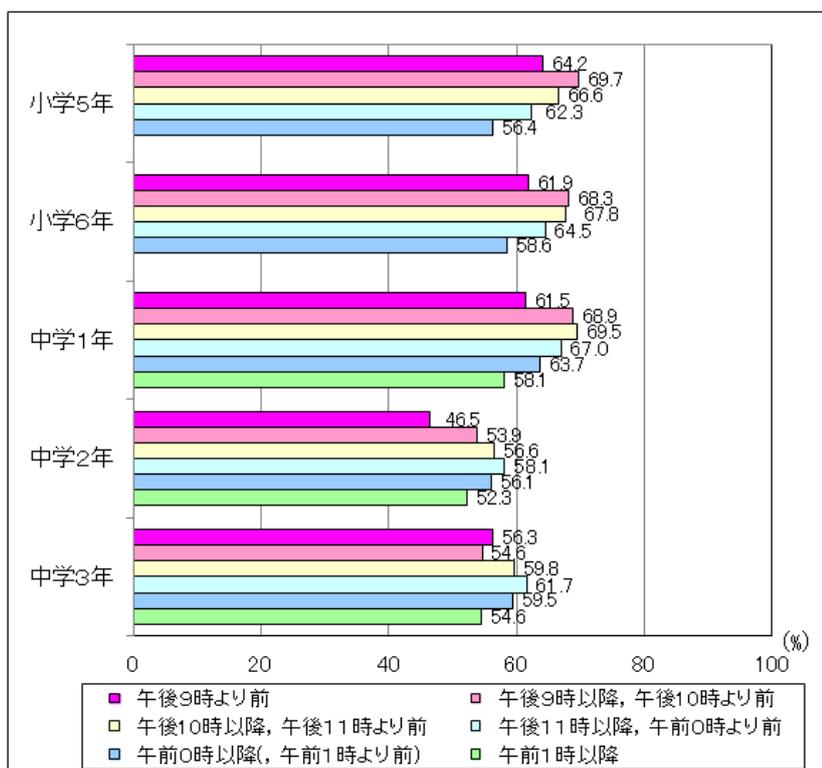


図5 「普段、何時ごろねますか」の回答状況と正答率

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学5年と小学6年では「午後9時以降、10時より前」、中学1年では「午後10時から11時までの間」、中学2年と中学3年では「午後11時から0時までの間」と回答した生徒の平均正答率が最も高くなっている。[図5]

ウ 「普段(月曜日から金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、テレビやビデオ・DVDを見たり、聞いたりしますか」について

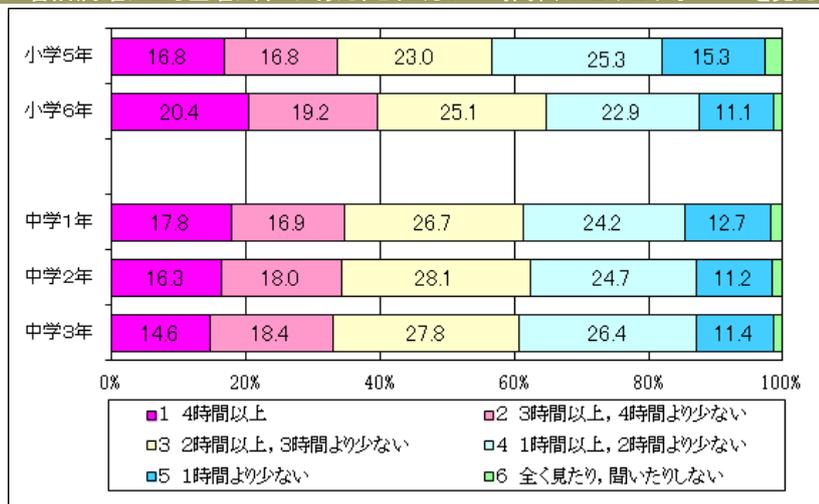


図6 「普段、1日あたりどれくらいの時間、テレビやビデオ・DVDを見たり、聞いたりしますか」の回答状況

小学5年生で「1時間以上、2時間より少ない」が25.3%と最も高く、小学6年生から中学3年生では「2時間以上、3時間より少ない」が最も高く、小学6年25.1%、中学1年26.7%、中学2年28.1%、中学3年27.8%となっている。また、小学校では、学年が上がると視聴する時間が長くなる傾向があるが、中学校では、逆に短くなる傾向が見られる。[図6]

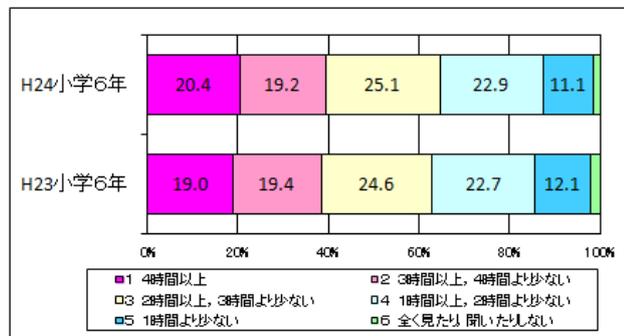


図7-1 小学6年生の「普段、1日あたりどれくらいの時間、テレビやDVD等を見聞きますか」の経年比較

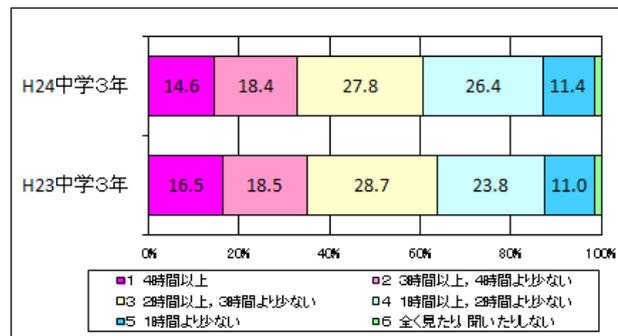


図7-2 中学3年生の「普段、1日あたりどれくらいの時間、テレビやDVD等を見聞きますか」の経年比較

この設問について、小学6年と中学3年を平成23年度と比べると、小学6年、中学3年共に、テレビやDVD等を視聴する時間は、中学3年では4時間以上の割合は低くなっている。全体的には、小学6年では、視聴する時間は増加しており、中学3年では減少している。[図7-1、7-2]

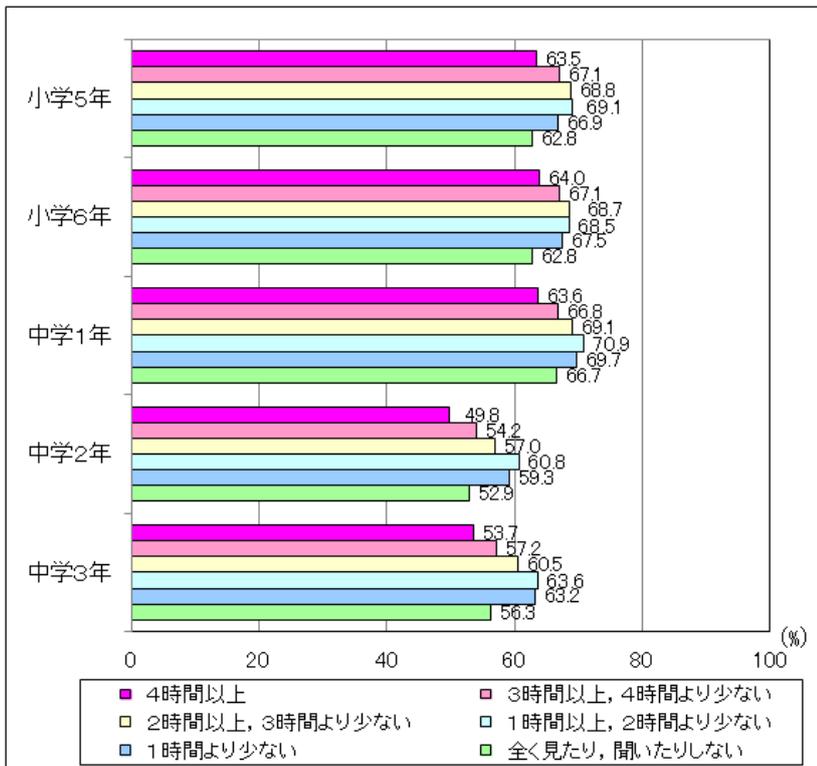


図8 「普段、1日あたりどれくらいの時間、テレビやDVD等を見聞きますか」の回答状況と正答率

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学5年と小学6年では、「1時間以上、2時間より少ない」「2時間以上、3時間より少ない」と回答した児童の平均正答率が高くなっている。中学校では、全ての学年で、「1時間以上、2時間より少ない」と回答した生徒の平均正答率が高くなっている。また、小学校、中学校共に、「4時間以上」「全く見たり、聞いたりしていない」と回答した児童生徒の平均正答率が低くなっている。[図8]

エ 「普段(月曜日から金曜日)、1日あたりどれぐらいの時間、テレビゲーム(コンピュータゲーム、携帯式のゲームをふくみます。)をしますか」について

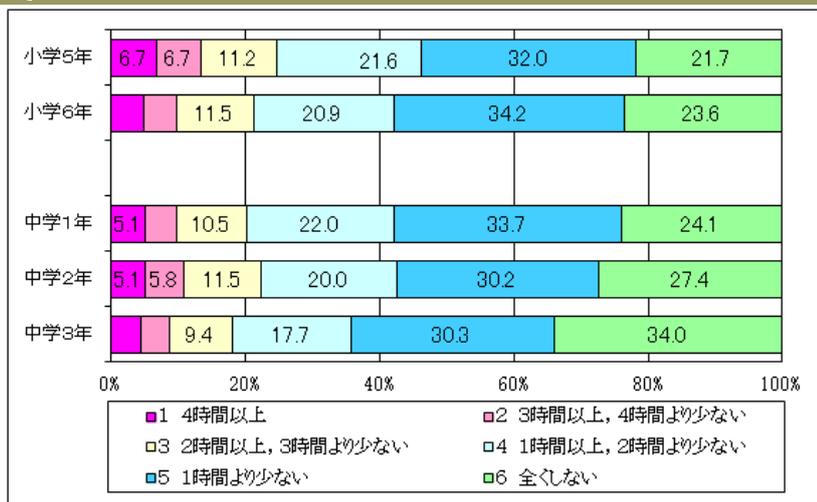


図9 「普段、1日あたりどれぐらいの時間、テレビゲームをしますか」の回答状況

どの学年においても「1時間より少ない」と回答している児童生徒の割合が最も高く、小学5年32.6%、小学6年34.2%、中学1年33.7%、中学2年30.2%、中学3年30.3%となっている。また、小学校、中学校ともに、学年が上がるとテレビゲームをする時間が減少する傾向が見られる。[図9]

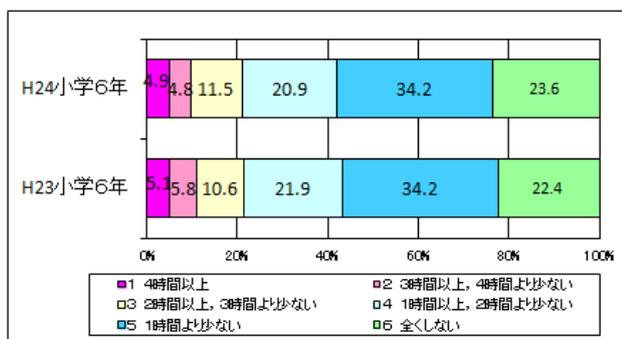


図10-1 小学6年生の「普段、1日あたりどれぐらいの時間、テレビゲームをしますか」の経年比較

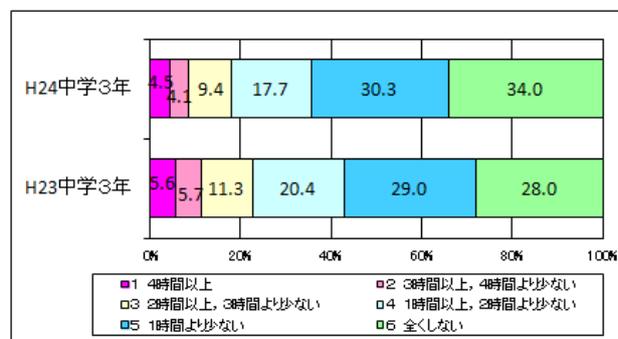


図10-2 中学3年生の「普段、1日あたりどれぐらいの時間、テレビゲームをしますか」の経年比較

この設問について、小学6年と中学3年とで平成23年度の調査と比較すると、小学6年、中学3年共に、テレビゲームをする時間は減少している。[図10-1、図10-2]

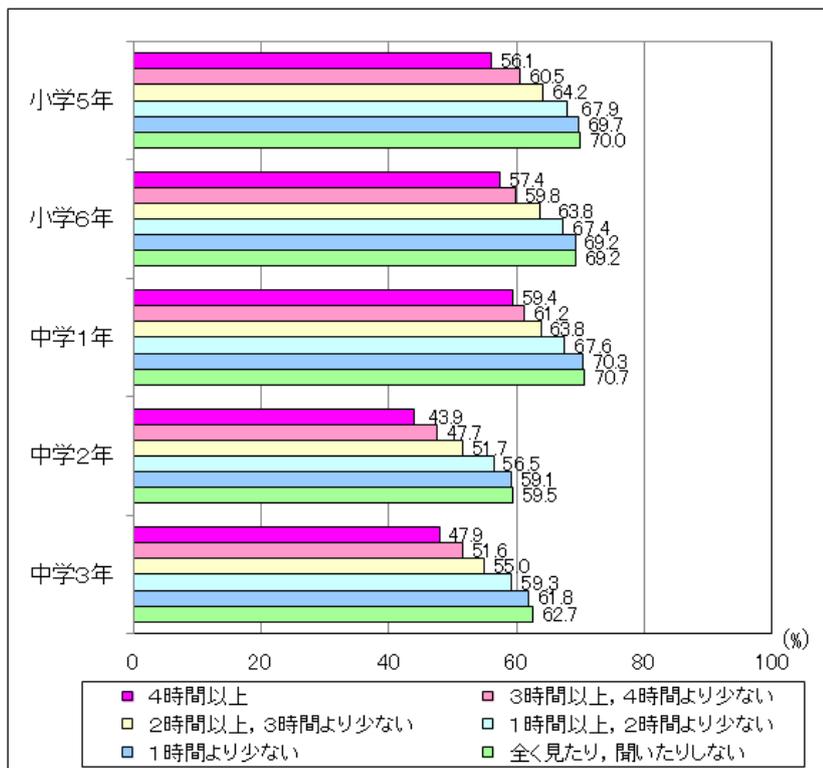


図11 「普段、1日あたりどれぐらいの時間、テレビゲームをしますか」の回答状況と正答率

回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において「全くしない」または「1時間より少ない」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高く、ゲームをする時間が増えるにしたがって、平均正答率も低くなっている。[図11]

○ 今後の指導に向けて

読書については、学年が上がるにつれて読書が好きだと感じている児童生徒の割合が減少する結果となった。「PISA2009の課題を受けた今後の取組」[※1]の中で、「子どもの読書活動の推進」を挙げている。そこでは、家庭、地域、学校における取組の一体的推進を掲げている。今回の調査結果を見ても、読書が好きだと感じている児童生徒ほど高い正答率を示していることから、読書をするのが学力の向上により影響を与えていることがうかがえる。今後もより一層の読書の定着を図る上において、朝の10分間読書や読書週間の設定、家庭・地域との連携による読書習慣の確立、学校図書館等の環境整備など、取組の工夫改善が望まれる。

就寝時刻については、家庭学習の時間や読書時間のことを考えると、早ければよいというわけではない。しかし、極めて遅い就寝時刻は、「授業に集中できない」「学習意欲が湧かない」といった学習意欲に悪影響を及ぼしている可能性があると考えられる。各学年の状況に応じて、帰宅してから就寝までの時間の有効な使い方について、家庭との連携を図りながら指導していくことが望まれる。

テレビゲームをする時間については、ゲームをする時間が増えるにしたがって、全教科平均正答率が低くなっていることがうかがえる。ゲームに夢中になった結果、家庭学習の時間の確保や生活の悪循環などの課題を抱えている可能性があると考えられる。そこでテレビゲームが身体や生活に及ぼす影響を考えさせた上で、家庭との連携を図りながら指導していくことが望まれる。

最終更新日：2012-10-15

平成24年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 教師意識調査結果の分析

教師意識調査結果の分析

教師意識調査の全てのグラフ(II 教師像共通グラフへ)

1 教科全般における指導法の工夫

- 小学校、中学校共に、学習の形態を工夫し、考えをひろげたり深めたりする活動を取り入れる教師の割合が高くなってきている。[図1、図3]
- 小学校、中学校共に、多くの単元で課外の時間を利用して、補充的な指導を行う教師の割合が高くなってきている。[図5]また、補充的な指導を行っている学校ほど、各教科とも正答率が高くなっている。[図6-1][図6-2]

この節では、

- ・ 表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業
- ・ 学習形態を工夫したメリハリのある授業
- ・ 理解が十分でない児童生徒への補充状況

の設問から、補充的指導、表現力の育成、総合的な学習の時間の指導、学習形態の工夫などの状況について分析する。

なお、学校スコアによるグループ比較においては、小学校、中学校の最高学年である小学6年生と中学3年生の結果を基に比較することとする。

ア 「発表や話し合い活動など表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業を行っていますか」について

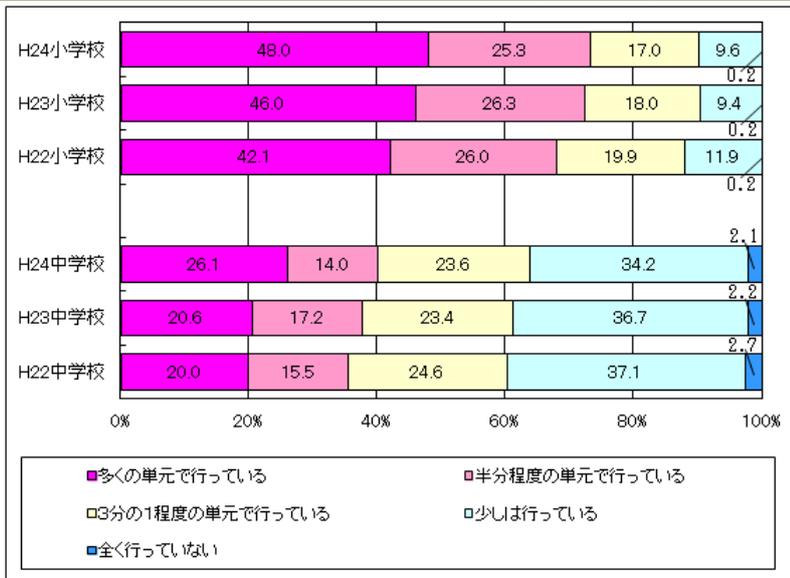


図1 「発表や話し合い活動など表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業を行っていますか」の回答の割合(経年比較)

平成24年度の結果を見ると、「多くの単元で行っている」「半分程度の単元で行っている」と回答をした小学校教師の割合は73.3%であり、同じ回答をした中学校教師の割合は40.1%である。

経年で比較すると、小学校、中学校共に、「多くの単元で行っている」「半分程度の単元で行っている」と回答した教師の割合は増加している。特に、中学校においては「多くの単元で行っている」と回答した教師の割合が、平成23年度から平成24年度にかけて5.5ポイント増加している。[図1]

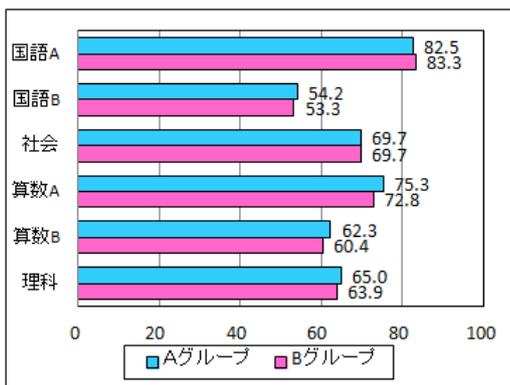


図2-1「発表や話し合い活動など表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業の頻度」と教科別正答率(小学6年生)

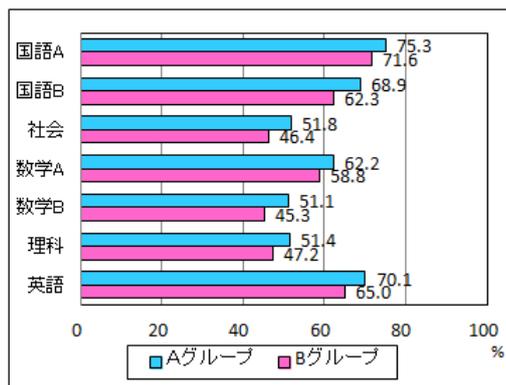


図2-2「発表や話し合い活動など表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業の頻度」と教科別正答率(中学3年生)

この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では、6教科中4教科においてAグループの平均正答率がBグループの平均正答率よりも高くなっている。中学校では、全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。特に、中学校では、国語Aと数学Bにおいては、6.0ポイント程度上回る結果となった。[図2-1][図2-2]

イ 「教師による指導を通して確実に学習内容を身に付けさせる場面とグループ活動やペア活動の形態を取り入れ、生徒の学び合い活動を通して学習内容を身に付けさせる場面を意識したメリハリのある授業を行っていますか」について

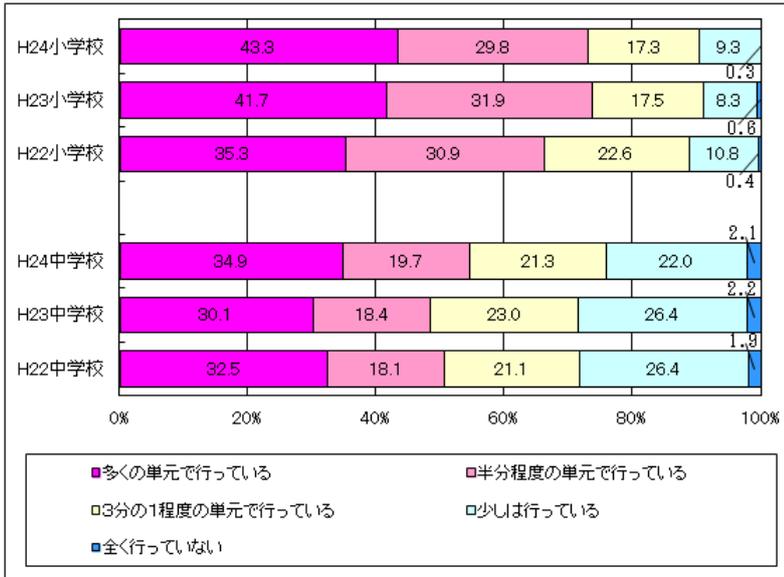


図3 「教師による指導を通して確実に学習内容を身に付けさせる場面とグループ活動やペア活動の形態を取り入れ、生徒の学び合い活動を通して学習内容を身に付けさせる場面を意識したメリハリのある授業を行っていますか」の回答の割合(経年比較)

「多くの単元で行っている」「半分程度の単元で行っている」と回答をした小学校教師の割合は73.1%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は54.6%である。小学校は中学校に比べると、教師による指導を通して確実に学習内容を身に付けさせる場面と、グループ活動やペア活動の形態を取り入れ、生徒の学び合い活動を通して学習内容を身に付けさせる場面を意識したメリハリのある授業を行っている教師の割合が多い。

経年で比較すると、小学校では、「多くの単元で行っている」と回答した教師の割合が年々増加しており、「半分程度の単元で行っている」と回答した教師の割合と合わせてみても、増加する傾向にある。中学校で「多くの単元で行っている」「半分程度の単元で行っている」と回答した教師の割合を見ると、平成24年度が最も高い割合を示しており、平成23年度と比べ5.5ポイント上回っている。中学校においても、メリハリのある授業を行っている教師の割合が増加する傾向が見られる。[図3]

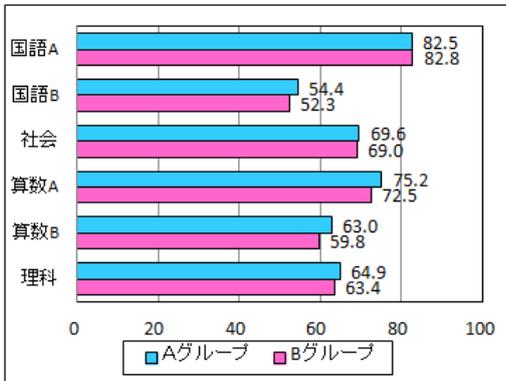


図4-1 「グループ活動やペア活動の形態を取り入れ、児童・生徒の学び合い活動を通して学習内容を身に付けさせる場面を意識した授業を行っている頻度」と教科別正答率(小学6年生)

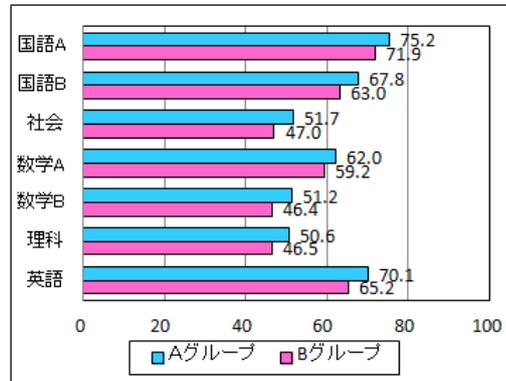


図4-2 「グループ活動やペア活動の形態を取り入れ、児童・生徒の学び合い活動を通して学習内容を身に付けさせる場面を意識した授業を行っている頻度」と教科別正答率(中学3年生)

この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では、6教科中5教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。中学校では、全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。[図4-1][図4-2]

ウ 「理解が十分でない児童生徒に対し、授業の合間や放課後などに更に指導していますか」について

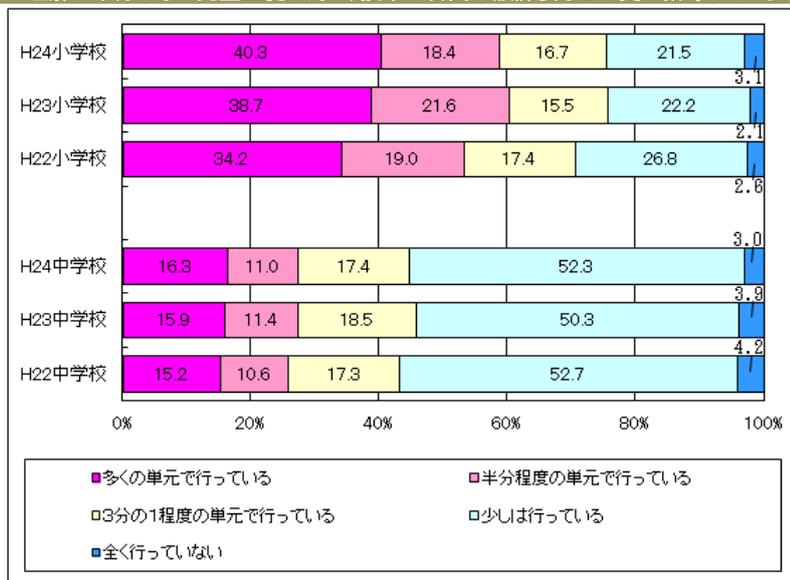


図5 「理解が十分でない児童生徒に対し、授業の合間や放課後などに更に指導していますか」の回答の割合(経年比較)

平成24年度の結果を見ると、「多くの単元で行っている」「半分程度の単元で行っている」と回答をした小学校教師の割合は58.7%であり、同じ回答をした中学校教師の割合は27.3%である。

経年で比較すると、小学校、中学校共に、「多くの単元で行っている」と回答した教師の割合が増加している。また、中学校においては、「全く行っていない」と回答した教師の割合が減ってきている。[図5]

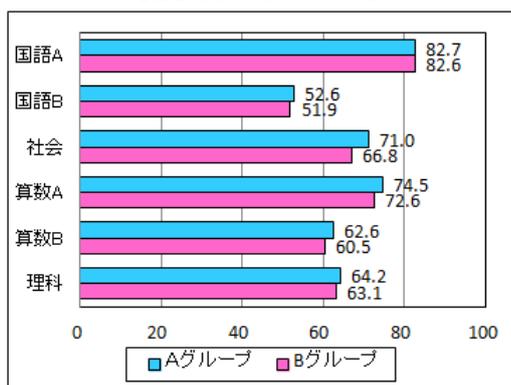


図6-1「理解が十分でない児童・生徒に対し、授業の合間や放課後に更に指導している頻度」と教科別正答率(小学6年生)

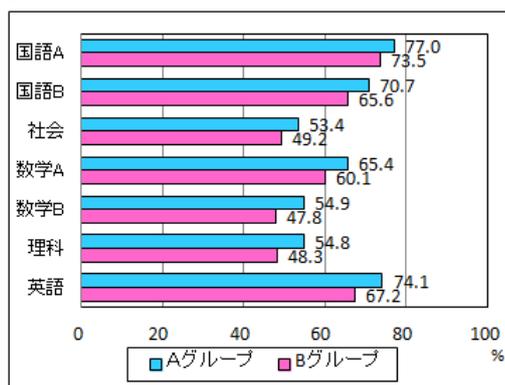


図6-2「理解が十分でない児童・生徒に対し、授業の合間や放課後に更に指導している頻度」と教科別正答率(中学3年生)

この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校、中学校共に、全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。特に、中学校では、7教科中5教科において5.0ポイント以上上回る結果となった。[図6-1][図6-2]

○ これからの指導に向けて

言語活動の充実を図る授業

今回の調査結果から、各教科の指導に当たって、「発表や話し合い活動など表現し、考えを広げたり深めたりする活動」が、学力の向上に効果的であることが読み取れた。また、学習指導要領にも「各教科等の指導に当たっては、児童(生徒)の思考力、判断力、表現力等をはぐくむという観点から、基礎的・基本的な知識及び技能を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童(生徒)の言語活動を充実すること。(※1)」とある。特に、表現する活動は、自分の考えを広げたり深めたりすることに有効であると考えられる。この表現活動は、「自分の考えを書いて表現する活動」と、「発表や話し合いなどの表現活動」に分けることができる。「自分の考えを書いて表現する活動」は、レポートや作文の作成などを通して、自分の考えを整理しながら、文章に分かりやすくまとめる活動である。「発表や話し合いなどの表現活動」は、作成したレポートや作文などを発表したり、自分の意見を、他者と交流させることにより、考えを深めたり、発展させたりする学習である。これらの表現活動を充実させることにより、児童生徒の知識・技能の定着が図られ、思考力、判断力、表現力が育まれることが求められる。

充実させる手立てとして、レポートや作文を書くだけでなく、書いたものを基に発表する場を設定したり、話し合う前に自分の考えを書いて整理させたりするなど、「自分の考えを書いて表現する活動」と「発表や話し合いなどの表現活動」との調和が図られ、両者の関連を図った指導を工夫することにあると考えられる。その上で、児童生徒の実態や学習内容によって、ペア学習やグループ学習などの場を設定したり、コンピュータや学校図書館など学習環境の効果的な活用を図ったりすることが挙げられる。

最終更新日：2012-10-15

平成24年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 教師意識調査結果の分析

教師意識調査結果の分析

教師意識調査の全てのグラフ(II 教師像共通グラフへ)

2 学習環境の活用

- 平成22年度、平成23年度と比べて、小中学校共に、コンピュータを活用した授業を行う教師の割合が増加している。[図1]
- 小学校、中学校共に、コンピュータを活用した授業を行っている学校ほど、各教科とも正答率が高くなってきている。[図2-1][図2-2]
- 小学校、中学校共に、コンピュータを、プレゼンテーションや資料提示に活用する教師の割合が高くなってきている。[図3]

この節では、授業におけるコンピュータの活用頻度と教科別正答率との関連及び活用内容について分析する。

なお、学校スコアによるグループ比較においては、小学校、中学校の最高学年である小学6年生と中学3年生の結果を基に比較することとする。

ア 「コンピュータを活用した授業を行っていますか」について

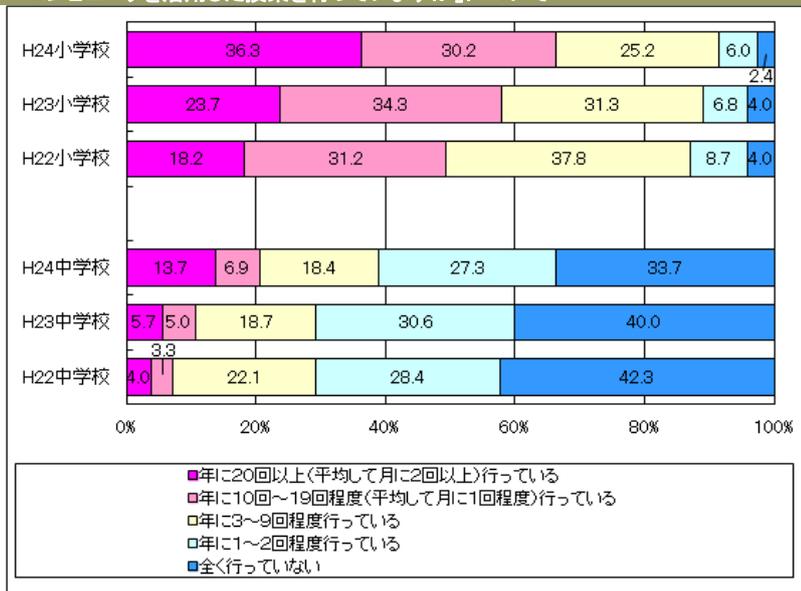


図1 「コンピュータを活用した授業を行っていますか」の回答の割合(経年比較)

平成24年度の結果を見てみると、「年に20回以上(平均して月に2回以上)行っている」「年に10回から19回程度(平均して月1回程度)行っている」と回答をした小学校教師の割合は66.5%であり、同じ回答をした中学校教師の割合は20.6%である。経年比較で見ると、「年に20回以上(平均して月に2回以上)行っている」「年に10回から19回程度(平均して月1回程度)行っている」と回答をした教師の割合は、小学校で8.5ポイント程度ずつの増加が見られる。中学校では、平成23年度と比較して9.9ポイント上回る結果であった。小学校、中学校共にコンピュータを活用した授業を行う傾向が見られる。[図1]

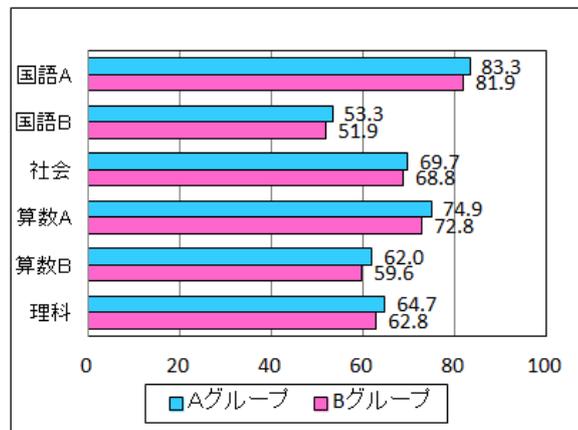


図2-1 コンピュータを活用した授業を行っている頻度と教科別正答率(小学6年生)

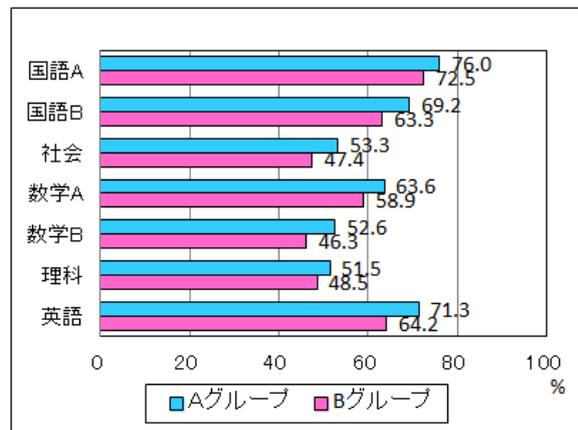


図2-2 コンピュータを活用した授業を行っている頻度と教科別正答率(中学3年生)

この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校、中学校共に全ての教科において、Aグループの平均正答率が高くなってきている。特に中学校においては、7教科中4教科で5.0ポイント以上、Aグループの方が上回る結果である。

[図2-1][図2-2]

イ 「授業では、コンピュータをどのように活用していますか」について

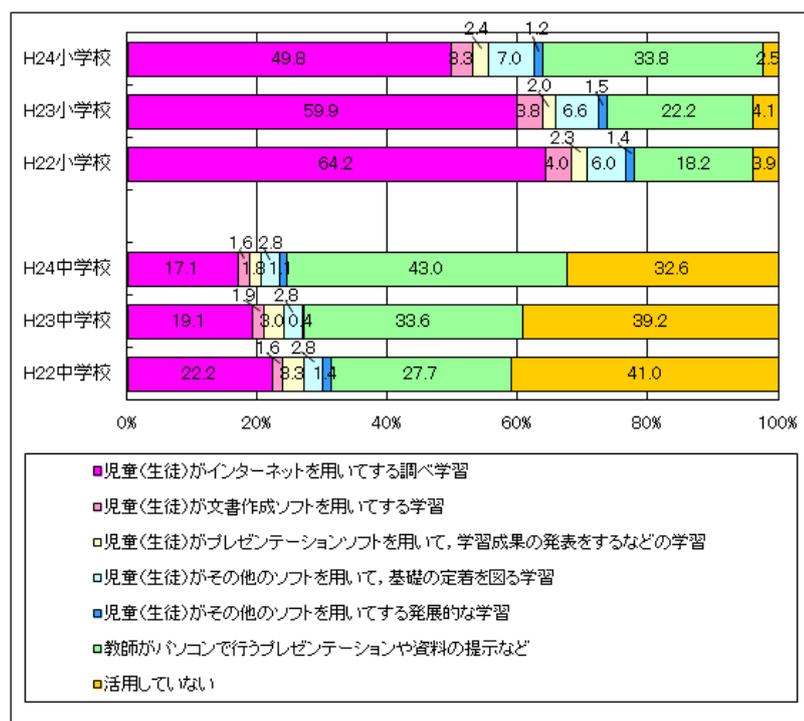


図3 「授業では、コンピュータを主にどのように活用していますか」の回答の割合(経年比較)

小学校ではコンピュータを活用していると回答をした教師の中において、「児童がインターネットを用いてする調べ学習」と回答をした教師の割合が49.8%と、最も高くなっている。これに対し、中学校では「教師がパソコンで行うプレゼンテーションや資料の提示など」と回答をした教師の割合が43.0%と最も高くなっている。

経年比較で見ると、「教師がパソコンで行うプレゼンテーションや資料提示など」の割合が、小学校、中学校共に毎年増加してきている。昨年度と比較してみても、「教師がパソコンで行うプレゼンテーションや資料の提示など」と回答した教師の割合が、小学校で11.6ポイント、中学校で9.4ポイント上回る結果であった。[図3]

○ これからの指導に向けて

ICTを利活用した授業づくりを

昨年度同様、平成24年度佐賀県教育の基本方針において、ICT利活用教育の推進が掲げられている。授業の中でコンピュータを活用することだけでなく、電子黒板やプロジェクターといったICT機器を活用することには、

- ・ 写真や図表を大きく提示することで教師の指示を明確にすることができる
- ・ 画面を見せながら話して、分かりやすく説明やまとめをすることができる
- ・ 身近に感じる教材を提示することで関心や意欲を高めることができる[※1]

など、様々な利点がある。

現在、佐賀県内の各学校においても、電子黒板やコンピュータなどのICT機器の充実が図られている。また、ICT利活用を図るための教師のスキルアップ研修も数多く行われている。インターネットを使う際の情報モラルに関わる教育を行う一方で、今後もコンピュータに限らずICTを利活用した授業づくりを推進していくことが大切である。

※1 一般財団法人コンピュータ教育開発センター 『学力向上 ICT指導ハンドブック』 平成20年

<http://www.cec.or.jp/monbu/report/handbook.pdf>

平成24年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 教師意識調査結果の分析

教師意識調査結果の分析

教師意識調査の全てのグラフ(II 教師像共通グラフへ)

3 家庭学習への関与状況

- 8割ほどの教師が、家庭での学習方法に対して、具体例を挙げながら指導している。平成23年度と比較すると、わずかなではあるが家庭学習の方法について指導を行っている教師の割合が増加している。[図1]
- 家庭における具体的な学習方法を挙げて指導している学校ほど、教科別平均正答率が高い結果であった。[図2-1][図2-2]

この節では、家庭での学習方法に関する指導と教科別平均正答率との関連について分析する。

なお、学校スコアによるグループ比較においては、小学校、中学校の最高学年である小学6年生と中学3年生の結果を基に比較することとする。

ア 「家庭での学習方法について、具体例を挙げながら指導していますか」について

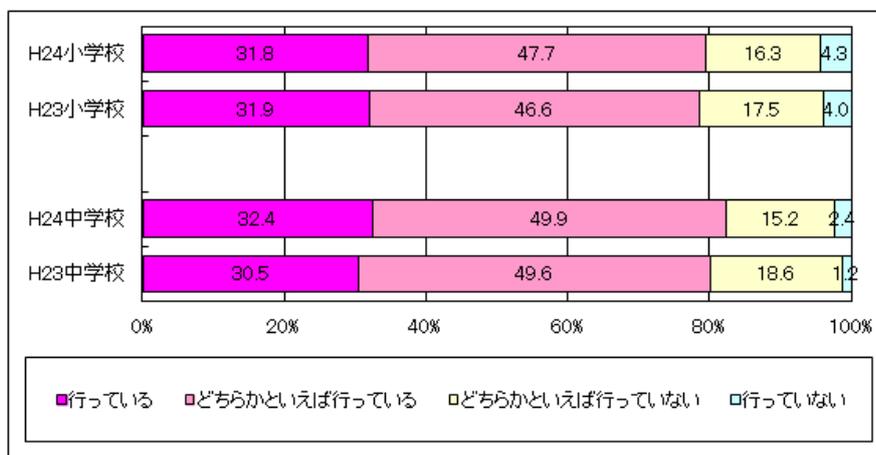


図1 「家庭での学習方法について、具体例を挙げながら指導していますか」の回答の割合(経年比較)

「行っている」「どちらかといえば行っている」と回答した小学校教師の割合は79.5%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は82.3%である。小学校、中学校共に8割程度となっている。[図1]

経年で比較すると、小学校、中学校共に大きな変化は見られない。

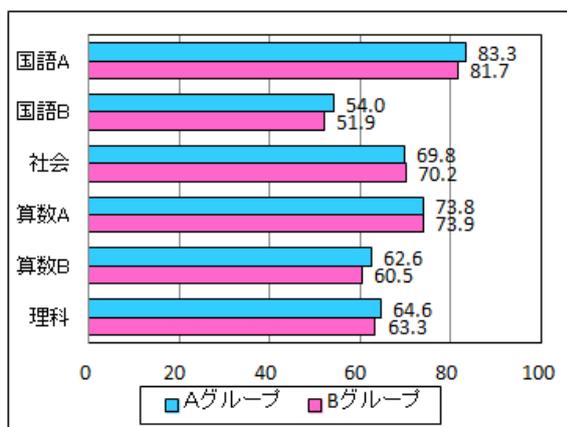


図2-1 家庭学習に対する指導の程度と教科別正答率(小学6年生)

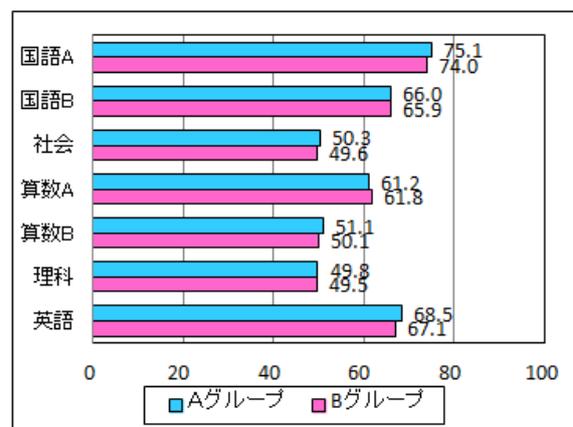


図2-2 家庭学習に対する指導の程度と教科別正答率(中学3年生)

この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では、6教科中4教科においてAグループの平均正答率が高くなる結果である。中学校では、7教科中6教科においてAグループの平均正答率が高くなる結果である。[図2-1][図2-2]

○ これからの指導に向けて**家庭との連携を図り、家庭学習の充実を**

学力の向上を図るための1つに家庭学習の充実があり、家庭との連携が大切となってくる。そのため、学校においては、学校独自に「家庭学習の手引き」を作成し、家庭学習の重要性や家庭での学習方法などについて示している。この中で、学習方法については、多くの教師が「家庭学習の手引き」で提示するだけでなく、具体的な学習方法を提示しながら指導に当たってきた。今後も、具体的な学習方法の提示を示すことはもちろんのこと、家庭学習の効果を児童生徒はもちろんのこと、家庭にも示すことで、家庭との連携を図り、家庭学習の充実を目指すことが大切である。

平成24年度佐賀県小・中学校学習状況調査及び全国学力・学習状況調査を活用した調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 教師意識調査結果の分析

教師意識調査結果の分析

教師意識調査の全てのグラフ(II 教師像共通グラフへ)

4 学校組織マネジメントに対する意識

- 教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していると回答した教師は9割を大きく上回っており、増加する傾向が見られる。[図1]
- 平成24年度の調査結果において、教育活動の具体的な内容についての共通理解が図られていると回答した教師は9割を上回っており、増加する傾向が見られる。[図3]

この節では、教育活動方針の理解、方針や内容についての共通理解について問うことにより、教師の学校組織のマネジメントに対する意識を把握する。

なお、学校スコアによるグループ比較においては、小学校、中学校の最高学年である小学6年生と中学3年生の結果を基に比較することとする。

ア「あなたは、学力向上や生徒指導など教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していますか」について

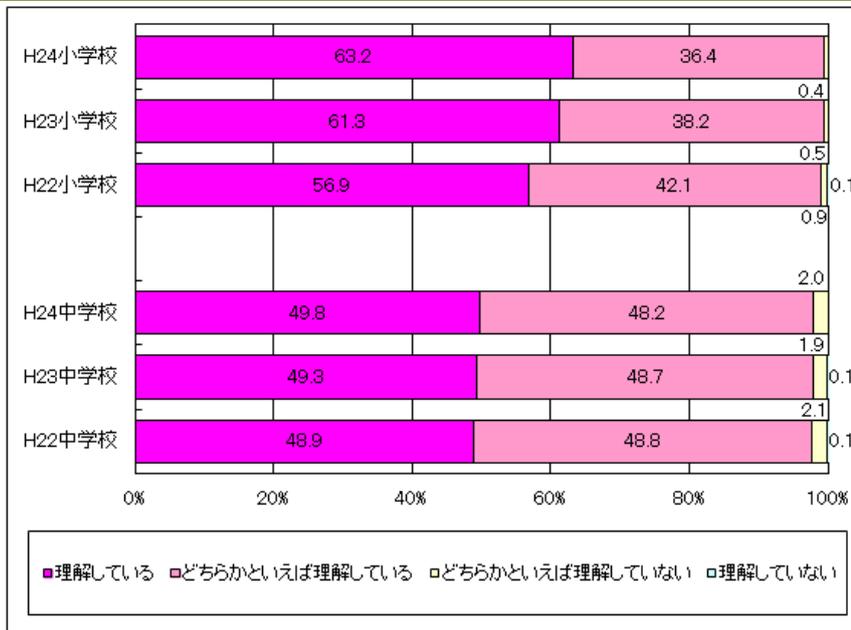


図1 学力向上や生徒指導など学校の方針を理解している割合(経年比較)

平成24年度の結果を見てみると、「理解している」「どちらかといえば理解している」と回答をした小学校教師の割合は99.6%であり、同じ回答をした中学校教師の割合は98.0%である。小学校と中学校のほとんどの教師が、学力向上や生徒指導など教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していることが分かる。

経年比較で見ると、小学校、中学校共に「理解している」「どちらかといえば理解している」と回答した教師の割合に大きな変化は見られないが、「理解している」と回答した教師の割合については、毎年増加する傾向にあることが分かる。[図1]

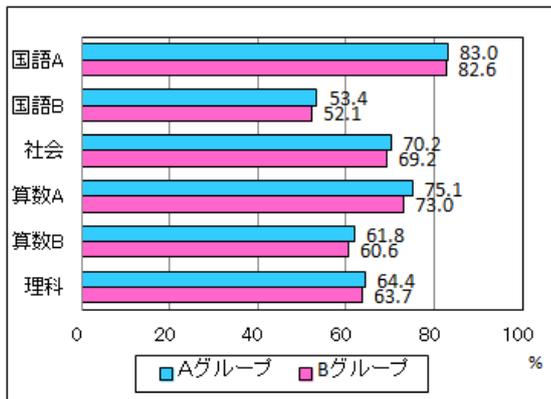


図2-1 学力向上や生徒指導など学校の方針に対する理解度と教科正答率(小学6年生)

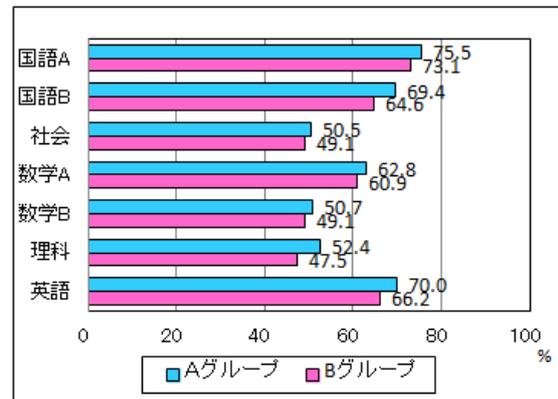


図2-2 学力向上や生徒指導など学校の方針に対する理解度と教科正答率(中学3年生)

この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校と中学校ともにAグループの平均正答率が高くなっている。特に、中学3年生の国語Bや理科では、5.0ポイント近く上回る結果である。[図2-1][図2-2]

イ「あなたの学校では、教育活動の方針や具体的な内容について、学校全体で共通理解が図られていると思いますか」について

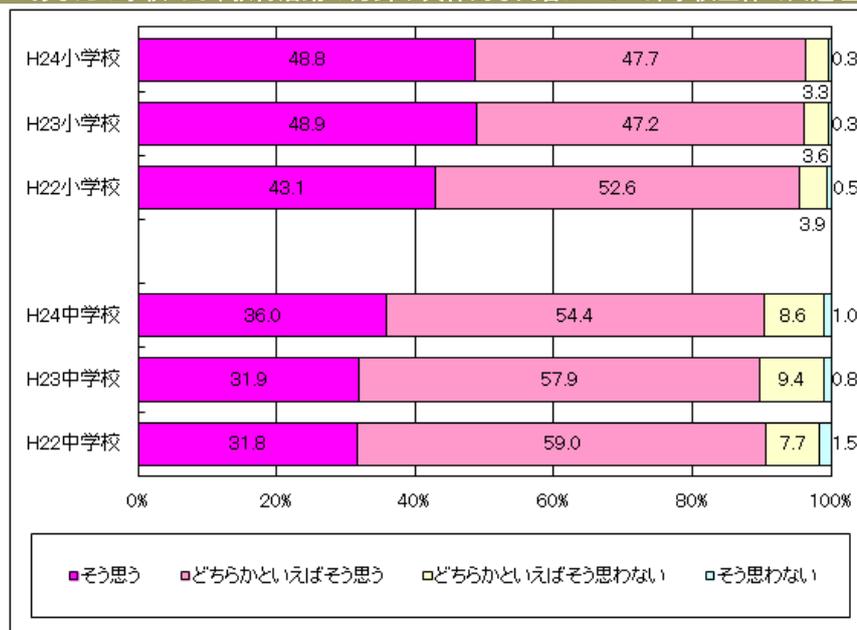


図3 教育活動の方針や具体的な内容についての共通理解が図られている割合(経年比較)

平成24年度の結果を見てみると、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した小学校教師の割合は96.5%である。同じ回答をした中学校教師の割合は90.4%である。小学校と中学校のほとんどの教師が、教育活動の方針や具体的な内容について、学校全体で共通理解が図られていると思っていることが分かる。経年比較で見ると、小学校、中学校共に大きな変化は見られないが、「そう思う」と回答した教師の割合を見ると、小学校では平成22年度から平成23年度にかけて増え、中学校では平成23年度から平成24年度にかけて増えている。各学校において、共通理解を図りながら指導に当たろうという意識の向上がうかがえる。[図3]

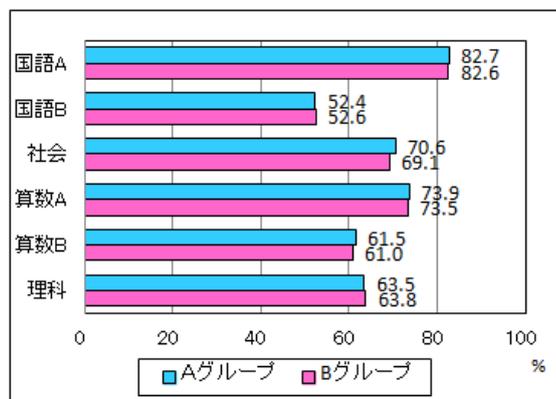


図4-1 教育活動の方針や具体的な内容についての共通理解度と教科正答率(小学6年生)

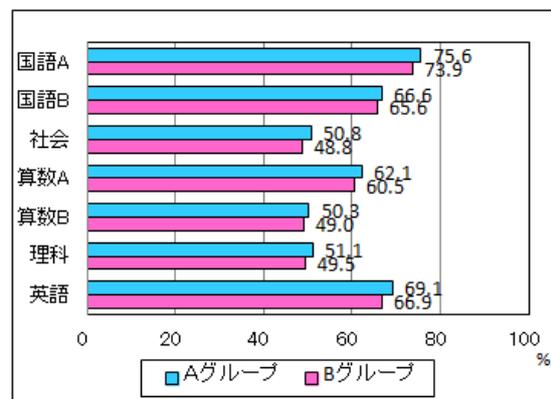


図4-2 教育活動の方針や具体的な内容についての共通理解度と教科正答率(中学3年生)

この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では、AグループとBグループで大きな差は見られないが、多くの教科でAグループの教科別平均正答率が高くなっている。中学校では、全ての教科で中学校ともにAグループの教科別平均正答率が高くなっている。教育活動の方針や具体的な内容について共通理解を図っている学校ほど、正答率が高くなっている。[図4-1][図4-2]

○ これからの指導に向けて

学校組織マネジメントの充実を

学校としての課題を解決していくためには、教師間の共通理解を図り、学校全体で取り組むことが大切である。そのため、学校組織マネジメントの充実は不可欠である。たとえ教師一人一人が、教育活動の方針や内容を理解していても、教師間の共通理解が図れていなければ、教育効果はなかなか向上しない。今回の調査結果を、学校組織マネジメントの視点から見た場合、少しずつではあるが向上する傾向にあり、おおむね良好であるといえる。これは、学校全体で教育に取り組む風土が醸成されていることの表れであると考えられる。また、学校の方針の共通理解が、学力向上により影響を与えていることが分かる。これからも、時間や場を工夫して設定し、教育活動の方針や具体的な内容について共通理解を図ることが大切である。